

市 原 市
今富塚山古墳確認調査報告書



平成 3 年度

財団法人 千葉県文化財センター

市原市
いま とみ つか やま

今富塚山古墳確認調査報告書

平成 3 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県内には、12,000基以上の古墳が所在することが、近年実施した分布調査の結果確認されています。これらは、古代房総の歴史を知る上で欠くことのできない資料となっています。

首都圏に位置する本県では、近年のめざましい経済の進展に伴い、ゴルフ場造成やリゾート開発など各種の大規模開発や、それらに関連したミニ開発が各地で進められています。そのため、地理的景観や歴史的風土に急激かつ大きな変貌が見られ、古墳をはじめとした埋蔵文化財の保護にも大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、県内に所在する主要古墳のうち、本県の歴史を知る上で貴重な古墳で、開発等により破壊される恐れのあるものについて、その範囲及び構築年代等を明らかにし、保存を含めた開発との調整を図るために基礎資料を得ることを目的に、測量調査及び確認調査を実施することにしました。この事業は、国庫補助を得て行っている重要遺跡確認調査事業の一環として、昨年度から実施しております。

今年度は、市原市に所在する今富塚山古墳を対象に、財団法人千葉県文化財センターへ調査を委託し実施しました。その結果、本古墳が全長110mを測る房総半島では最も古い定型化した大型の前方後円墳の一つであることが確認できるなど、大きな成果を得ることができました。

この事業の実施にあたっては、文化庁をはじめとして、地元市原市教育委員会、土地所有者の皆様方など多くの方にご協力いただきました。関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が今富塚山古墳の保護施策を推進するため、また、広く学術資料としても活用されることを願ってやみません。

平成4年3月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長 白石竹雄

凡　　例

1. 本書は、千葉県市原市今富字本郷762に所在する今富塚山古墳（遺跡コード219-059）の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を得て、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 現地調査は、平成3年10月1日から10月30日にかけて実施した。
4. 調査及び整理・報告書の作成は、研究部長 天野 努、部長補佐 渡辺智信の指導のもとに主任技師 永沼律朗が担当した。
5. 調査の実施にあたっては、古墳が所在する正光院（住職 広瀬秀明、檀家総代 鶴岡禎吉）・今富地区（今富三部町会長 白鳥義博、今富二部町会長 錦織隆夫、今富一部町会長、鈴木宏作）の方々から多くの御協力を賜るとともに、発掘区の地主の永野庄成、白鳥定義、鶴岡定夫から御協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略）
6. 調査の実施にあたっては、市原市教育委員会から多くの御協力を賜った。
7. 調査にあたっては、下記の方々より種々の御教示をいただいた。記して謝意を表します。
鈴木仲秋氏には、今富塚山古墳が掘削された当時のようすを教えていただくとともに、その時撮影した埋葬施設の写真を提供していただいた。
田中新史氏には、整理の段階で多くの示唆に富む意見と資料を教えていただいた。また、今回の報告書のために、大日山古墳の埋葬施設断面と姉崎ニ子塚古墳の写真を提供していただいた。
なお、今回報告書に載せた一覧表の規模のうち、各々の報告書に記された計測値と異なる数値及び未計測のものについては、田中新史を中心に白井久美子・小出紳夫・永沼律朗の4名が、これまでに計測して得た成果をもとに記載している。

本文目次

序 文

凡 例

| | |
|------------------|----|
| Iはじめに | 1 |
| 1. 今富塚山古墳の位置と環境 | 1 |
| 2. 今富塚山古墳周辺の主要遺跡 | 1 |
| II調査経過 | 4 |
| 1. 過去の今富塚山古墳 | 4 |
| 2. 調査経過 | 4 |
| 3. 調査方法 | 5 |
| III遺構 | 6 |
| 1. 墳丘 | 6 |
| 2. 周溝 | 7 |
| 3. 埋葬施設 | 8 |
| IV遺物出土状況 | 9 |
| 1. Gトレンチ | 9 |
| 2. その他のトレンチ | 9 |
| 3. 表採 | 9 |
| V出土遺物 | 9 |
| 1. 底部穿孔土器 | 9 |
| 2. 下層住居跡出土遺物 | 10 |
| 3. その他の遺物 | 10 |
| VIまとめ | 11 |
| 1. 墳丘 | 11 |
| 2. 埋葬施設 | 13 |
| 3. 底部穿孔土器 | 16 |
| 4. 房総の前期古墳 | 16 |
| 5. 姉崎古墳群 | 18 |
| 6. 結語 | 21 |
| 文 献 | 22 |

挿図目次

| | | | |
|-------------------------|----|-------------------------|----|
| fig.1 調査区内出土石器 | 1 | fig.6 房総半島の大型古墳及び主要前期古墳 | 16 |
| fig.2 今富塚山古墳の位置と周辺の主要遺跡 | 2 | fig.7 姉崎古墳群主要古墳分布図 | 18 |
| fig.3 発掘区位置図 | 5 | fig.8 姉崎天神山古墳埴丘測量図 | 19 |
| fig.4 今富塚山古墳埴丘復原図 | 12 | fig.9 姉崎二子塚古墳埴丘測量図 | 19 |
| fig.5 木炭使用埋葬施設内蔵古墳位置図 | 13 | | |

表 目 次

| | | | |
|----------------------|----|---------------------------|----|
| tab.1 今富塚山古墳周辺の主要遺跡 | 3 | tab.3 房総半島の大型古墳及び主要前期古墳一覧 | 17 |
| tab.2 木炭使用埋葬施設内蔵古墳一覧 | 14 | tab.4 姉崎の主要古墳 | 19 |

図版目次

PL.

- | | |
|------------------------|---|
| 1 航空写真1 | 空からみた今富塚山古墳周辺の地形（平成3年1月6日撮影） |
| 2 航空写真2 | 後円部のある今富塚山古墳（昭和36年9月28日撮影） |
| 3 空中写真1 | 1.前方部上空から 3.北東方上空から |
| 4 空中写真2 | 1.東方上空から 3.西方上空から 2.北西方上空から |
| 5 墳丘北側及び後円部 | 1.くびれ部の道 北東から 2.墳丘削平状況 東から 3.前方部からみた後円部 北西から |
| 6 前方部 | 1.前方部前面 北から 2.前方部墳頂 北から 3.前方部墳頂(H) トレンチ 北西から |
| 7 前方部(G) トレンチ | 1.墳丘盛土 南西から 2.周溝内側立ち上がり 南西から 3.周溝発掘状況 北西から |
| 8 前方部北方(C) トレンチ | 1.削平南西端 北東から 2.調査区及び土層 南から 3.前方部前面 北西方上空から |
| 9 前方部南西方 (D・E) トレンチ | 1.E トレンチ発掘状況 南から 2.D トレンチ発掘状況 南西から 3.D トレンチ南西端落ち込み 南から |
| 10 墳丘北側(A・B) トレンチ | 1.A トレンチ発掘状況 南から 2.A トレンチ土層断面 東から 3.B トレンチ発掘状況 南から |
| 11 後円部南東方 (F) トレンチ | 1.発掘状況 南東から 2.中世遺構検出状況 東から 3.トレンチ北西端発掘状況 東から |
| 12 墳丘削平状況 | 1.後円部削平状況 東から 2.くびれ部切り通し断面南東から 3.くびれ部切り通し 東から |
| 13 底部穿孔土器 | 1.口縁部 2.口縁部 3.頸部 4.肩部 5.胴部 6.底部 |
| 14 その他の土器 | 7~9.下層住居跡出土遺物 10~22.各トレンチ及び表探土器 |
| 15 参考 | 後円部掘削状況（昭和41年掘削時鈴木仲秋氏撮影） |
| 16 参考 | 1.大日山古墳埋葬施設断面（田中新史氏撮影） 2.鶴崎ニ子塚古墳（昭和44年田中新史氏撮影） |

図面目次

PLAN

- 1 周辺地形測量図
- 2 墳丘測量図後円部細部
- 3 墳丘測量図後円部細部
- 4 墳丘測量図後円部細部
- 5 墳丘測量図前方部細部及びHトレンチ
- 6 前方部確認Gトレンチ
- 7 前方部北方Cトレンチ
- 8 前方部南方D・Eトレンチ
- 9 墳丘北側A・Bトレンチ
- 10 後円部東南方Fトレンチ

付図 今富塚山古墳墳丘測量図

I はじめに

1. 今富塚山古墳の位置と環境 (fig.2・fig.6・PL.1・PL.2参照)

今富塚山古墳は、市原市今富字本郷762他に所在する。市原市の位置する房総半島は、南半がやや険しい丘陵で、北半は平坦な上総台地が広がる。房総半島の多くの河川は、半島南半の丘陵に源がある。その内東京湾に注ぐ大きな河川としては、千葉市から海に続く都川、千葉市と市原市の境を東流する村田川、市原市を北流して五井から海に注ぐ養老川、木更津市を河口とする小櫃川、富津市を河口とする小糸川、さらに南方の富津市湊の湊川がある。なかでも村田川・養老川・小櫃川・小糸川は、河口に扇型に広がる大きな沖積平野を形成している。これらの河口近くの丘陵には、多くの古墳時代前期の集落及び古墳が所在している。

清澄山系に水源を有する養老川は、房総丘陵を侵食しながら北上して下流域で大きく西に屈曲し河口に三角州を形成する。今富塚山古墳は、養老川が西に曲がりだし洪積平野が広がり始める地点の南方に位置する。所在地は、丘陵上ではなく養老川の沖積平野に近い低丘陵上で、墳丘裾と水田面の比高は、約7mほどである。現在古墳の西側には旧県道が走り、県道と墳丘の間は無住寺であるが本堂と墓石が多数存在する正光院の境内となっている。

2. 今富塚山古墳の周辺主要遺跡 (fig.2参照)

今富塚山古墳の位置する地域は、今富遺跡として周知の遺跡に認定されている。この遺跡は、今回の調査で出土した遺物等から、先土器時代から歴史時代まで続くことが確認できた。fig.1は、その内の石器の実測図である。なかでも弥生時代から古墳時代のはじめにかけては、かなり多くの住居が営まれていたことが予想できる。今富塚山古墳の北側の台地には、小規模の古墳がいくつか点在する。その内の1基新山古墳は、本古墳の南西700mの丘陵上に位置し、6世紀前半の築造と考えられる径20mほどの円墳である。木棺直葬と考えられる埋葬施設からは、

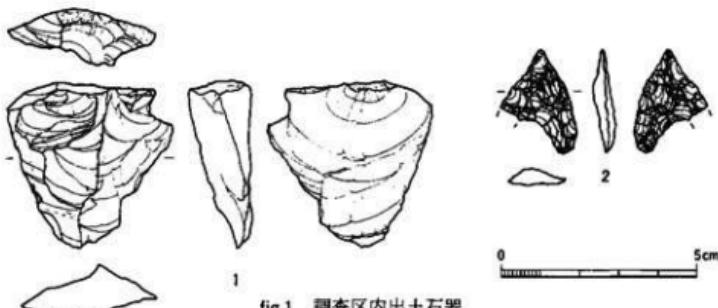


fig.1 調査区内出土石器



fig.2 今富塚山古墳の位置と周辺の主要遺跡 (1:25,000)

銀製の飾りの付く大刀が出土している。また、新山1号墳の北側台地先端に所在する長老塚古墳は、一辺30mの方墳で既に埋葬施設の石材は抜き取られてしまっているが横穴式石室と考えられる。石室の特徴は不明であるが、旧表土上面で確認された石室の掘り方を見ると、石室は方墳の一辺の中央部に開口せず、やや変則的な感じを受ける。出土した須恵器から7~8世紀頃の築造と考えられる。これらの古墳は、今富西部古墳群の一部であり、他にも2・3基の古墳がある。また、この古墳群の東方にも、今富東部古墳群と呼ばれる4・5基の円墳がある。いずれも調査は行われてなく、古墳の内容は不明である。他にも今富塚山古墳の南方の台地には小規模の古墳が多数あるが、それらも調査は行われていない。

視界を広げると、西方には姫崎天神山古墳・姫崎二子塚古墳をふくむ大型の前方後円墳をはじめ多くの古墳が続く。養老川対岸の台地上には、県内でも重要な遺跡・遺構の集中する国分寺台遺跡群（仮称）が位置する。この遺跡群は土地区画整理事業に伴って、発掘調査が進められているもので、広い事業地内に上総国分僧寺・国分尼寺を含む遺跡と422基の古墳が確認されている。遺構の時期も先土器時代から中世にまで及びその遺構密度の高さは、全国的にみても有数の遺跡群である。遺跡には、西広貝塚・紙匱原貝塚や小銅鐸の出土した天神台遺跡、学会に出現期古墳のあり方を示した神門古墳群、そして大規模な調査により多くの成果をあげた上総国分僧寺・国分尼寺等がある。この遺跡群中の稲荷台1号墳から銘文のある鉄劍が出土していたことが判明し、マスコミで騒がれたことは記憶に新しい。国分寺台遺跡群の発掘調査の成果は、この地域の歴史を考える上で多くの重要な資料を示しているのである。また、養老川をはさむ沖積平野には、山田寺系の軒先瓦を出土する今富廃寺跡や海上郡衙跡・上総国府跡と推定される地域もある。

古墳時代前期のこの地域は、養老川北岸に出現期古墳である神門古墳群をはじめ多くの古墳が存在し、姫崎地区には県内でも有数の大型前方後円墳が存在する。今富塚山古墳は、これらの古墳から等距離の地点に位置しているのである。

| fig.1 番号 | 遺跡名 | 概要 |
|-------------|---------|---|
| 1 | 今富塚山古墳 | 本報告参照。 |
| 2 | 今富遺跡 | 弥生時代から古墳時代の集落が中心か。一部調査が行われ掘立柱建物跡も発見されている。 |
| 3 | 新山1号墳 | 径20mの円墳。銀製の刀装具が付く刀出土。表土でガラス製勾玉出土。 |
| 4 | 長老塚古墳 | 一辺30mの方墳。石材はほとんど残らないが横穴式石室確認。鐵劍・須恵器出土。 |
| 5 | 宮原御所 | 中世。館跡・土塁のこる。 |
| 6 | 原訪台9号墳 | 径45m、高さ5mの円墳。 |
| 7 | 今富廃寺跡 | 奈良県山田寺系軒先瓦出土。 |
| 8 | 海上郡衙跡 | 西野遺跡として一部発掘調査が行われている。 |
| 9 | 上総国府推定地 | 地名總社。市原市市原地区とともに上総国府の推定地。 |

tab.I 今富塚山古墳周辺の主要遺跡

* 四古墳とも東関東自動車道建設に伴い、千葉県文化財センターによって調査された。

II 調査経過

1. 過去の今富塚山古墳 (PL.2・PL.15参照)

地元では、この古墳を以前から塚山と呼んでいたという。この塚山が今富塚山古墳として世間に知られるようになったのは、昭和41年以降のことである。後述するように、現在古墳は大きく改変され、一瞥して大型の前方後円墳とは即断できない状況にある。前方部の半分は、古くに寺の建物か墓をつくるために削られている。前方部と後円部の境は、道で分断されている。道がつけられたのは、地元の人たちの話しによれば昭和の初め頃のようである。初めは人が通れる程度であったものが徐々に広げられ、現在のようになったのは自動車が通るようになってからだという。PL.2の空中写真は、昭和36年9月28日に建設省国土地理院によって撮影されたものである。この写真を見ると、当時はほぼ円形の後円部があることが確認できる。この墳は、塚山があまりにも大きいこと、現況が整った古墳の形をしていないことから古墳とは考えられなかったという話も聞いた。後円部が大きく削平されたのは昭和41年の頃である。後円部の北側から重機で盛土が崩され、土は他の場所に運びきられてしまったのである。この土取りの際に、後円部墳頂下で中央部が窪んだ木炭の層が確認された。PL.15の写真は、その時現地に赴いた鈴木仲秋氏が撮影したものである。このことからこの塚山は、埋葬施設に木炭を使用した大型の前方後円墳であることが判明したのである。塚山が古墳であるとの確信を得た鈴木氏は、掘削の中止を求めたが聞き入れてはもらえなかつたとのことである。

しかし、その後現在に至るまで調査は行われてなく、当時の状況も公にされていないので、この塚山が本当に前方後円墳なのか疑う人さえいる状況であった。そして、平成2年には墳丘裾から続く平坦面が残っている前方部先端北側が、墓地拡張のために削平されてしまった(今回調査地点Cトレント)。しかも、掘削のために前方部の南西隅を削って重機を搬入し、排土は前方部前面に積み上げてしまったのである。幸いにこの地点は、今回の調査で古墳築造当時の面は既に残ってなかつたことが確認できた。このようなことが起きたのは、塚山の性格が正しく理解されていないことにも一因があったと思われる。

2. 調査経過

本古墳の調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要古墳確認調査の一環として行われたもので、財団法人千葉県文化財センターが委託を受け、平成3年10月1日から同月29日にかけて発掘調査を実施した。また、平行して墳丘測量図の作成も行った。発掘調査は、既に設定されている少ない予算と短い調査期間に合わせて行った。しかし、この期間は例年ない長雨にたたられ、毎日天候を気にしながらの調査をしいられた。そのため調査は、思うように進

まず、調査地点によっては雨水と涌水を汲み出さなければ調査ができない日も多かった。

今回は、埋葬施設を含む後円部の大部分と前方部及び墳丘裾がかなり削平されているので、墳形の確認と墳丘規模の確定を目的とした発掘調査を行うこととした。現状をみると墳丘裾はかなり削平されているようであるが、周溝を確認することにより墳丘規模が確定できると考えた。また、残っている前方部の平坦面も調査して、盛土と他の埋葬施設の有無も確認することとした。

墳丘測量と平行しての発掘調査のため、墳丘への発掘区設定は最後にして、まず墳丘のまわりに発掘区を設定し周溝の検出を行った。発掘区には長雨で水が溜まり、その水をかきだしながらの発掘のため調査は思うようには進まなかった。それでも数本の発掘区を調査したが、墳丘の周囲はかなり削平されているらしく周溝は確認できなかった。最後に調査を行った前方部の発掘区で、ようやく底部穿孔の土器が出土した周溝が確認できた。しかし、その時には予定期間が時間切れ間近であり、細かい調査はできなかった。また、前方部の調査地点は前年に積み上げられた排土の上面から周溝底まで2mほどあることも、簡単に発掘区の拡張のできない理由であった。識者から調査にはいる前に、前方部前面の調査は前年に盛られた排土を除去してから行うこと、そして現状からみてこの部分だけが今富塚山古墳の築造当初の状態をとどめているところと思われる所以、面的に墳丘裾を確認する必要があるとの意見をいただいていたが、それを実行できなかったことをこの時は非常に後悔した。

3. 調査方法 (fig.3参照)

発掘調査は、墳丘に合わせて発掘区を設定しておこなった。調査した発掘区はfig.3に示した。発掘区は基本的に2m幅で設定したが、場所によっては1mとした。しかし、測量図からもわかるように発掘区の設定できる箇所は限られており、意図するところに発掘区が設定できなかったり、設定した発掘区でも、植木等はさけざるを得なく全面的に調査できない部分もあった。

また、後円部前方の調査区(Fトレンチ)と前方部南側の調査区(D・Eトレンチ)は、長雨の影響で涌き水が絶えず流れだし、発掘終了面の等高線測量はできなかった。

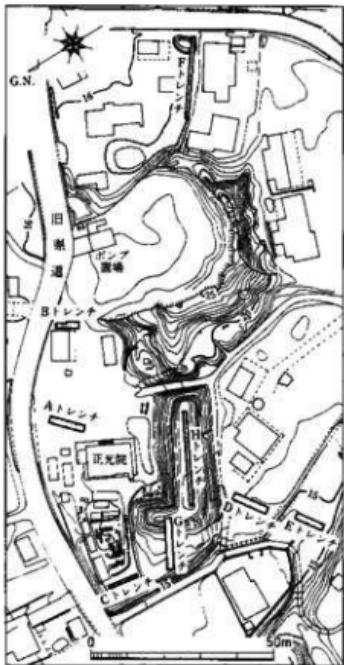


fig.3 発掘区位置図 (1:1,600)

III 遺構

1. 墳丘 (PL.2~6・PLAN2~7・付図参照)

現在墳丘は、後円部が背の高い篠と雑木で覆われ、くびれ付近には墓がある。前方部は10年ほど前までは藪になっていたそうであるが、最近は毎年下草刈をしているとのことであった。墳丘北側は、寺の境内であり各所に墓石が建てられている。後円部の東側から前方部の南西側は宅地になっている。前方部前面は、三角形に削り残されているが、その先は道で高さ2.5mほど削平されている。ただ、墳丘の南西方で確認した谷がこの部分には続いていると思われる所以、大きくなれば削平されていないと思われる。

後円部の中央は、昭和41年の土取りで大きくえぐられ、北側が開く逆C字形に墳丘の斜面部が残るに過ぎない。墳丘の掘削面は、ほとんどの部分が垂直になるかオーバーハングしており、今でも少しづつ墳丘が崩れている。削平された箇所は、掘削から年月がたちかなり背の高い篠及び雑草に覆われている。掘削面の土層が見える部分での観察では、盛土は白色粘土・ローム土それに砂と暗褐色土で構成されている。積み方の細かい点までは不明であるが、かなり大きな単位で土層の違いが確認できる。現状では、木炭や埋葬施設の残存部は確認できない。旧表土層は、おおむね南から北に向かって下がっているようである。削平された部分は、旧表土面から2mは下がっている。崖面を細かく観察すると、地山と思われるしまりのよい黄褐色の砂層の下に暗褐色土があつたりする。これらは、昭和41年の重機による掘削の際に土が移動したものなのか、遺構なのか明らかにすることはできなかった。後円部北東端近くには、消防ポンプ置き場が建てられている。その東側の高まりも、一部は墳丘の残丘と考えている。後円部の東から南側は、住宅の建設のためかなり削られ墳丘裾は不明である。古墳築造前の地形は、後円部南側から続く台地が前方部の方へ延びていたと考えられる。そのためか後円部南側の住宅面が一番高く、後円部前面から東側の道路に向かって平らな宅地ではあるが、それぞれ70~80cmづつ段がついて下がっている。また、後円部の南側から西に向かっても下がっている。後円部のくびれ部に近い箇所には、墓石が建てられ狭い平坦面が作り出されている。くびれ部に近い墳丘中央部は尾根状になっているが、この部分は墳丘本来の姿をとどめているかもしれない。後円部の中央部は削平され不明であるが、測量図から判断すると後円部の最高点はもう少し高かったと思われる。地元の人たちの話でも、後円部が大きく削平される前は、北側の旧県道の際から急な斜面の墳丘がはじまり、上のも大変だったという。また、上は広く平らになっていたとも話していることから、当時は後円部墳頂に平坦面があり、後円部はほぼ完全な形で残っていたと思われる。

墳丘のくびれ近くには、寺の境内と墳丘の反対側を結ぶ道がつけられており、後円部と前方

部が完全に分断されている。道幅は2mほどである。道は南西側が北東側より1mほど高い。法面は雑草に覆われ細かい観察はできないが、前方部側の法面では墳丘の盛土と旧表土が確認できる。崖面のほぼ中央には、旧表土層下の住居跡があると思われ、上からの土が崩れ落ちて明確ではないが、住居跡の覆土と思われる土層から土器片を採集している(PL.12参照)。

測量図からわかるように、前方部は復原できる後円部の大きさからみると短い。現在前方部は長靴状に改変されてはいるが、墳頂部は先端に向かって徐々に高くなっている。Fトレンチの土層断面からみると、前方部の墳頂部はさほど改変を受けたようすではなく、ほぼ平坦で先端がくびれ部に比べて約1mほど高い墳丘は前方部の本来の姿に近いものと思われる。前方部の南東側墳丘裾は少し内側に削られているかもしれないがほぼ直線であり、墳丘本来の裾に近いと思われる。前方部北側は、かなり大きく削られている。現在の寺の本堂は関東大震災で倒壊した旧本堂の後に建てたものだそうだが、その時には既に現在のような地形になっていたという。A・Bトレンチの調査では、現地表面から40cmほどの深さで黄褐色砂の地山になってしまい、周溝の落ち込みや他の遺構は確認できず新しいと思われる擾乱の穴があった。Aトレンチ内の東側が緩く傾斜しているのは、自然地形のようである。このことから墳丘北東側の後円部から前方部先端の墓石が集中するところまでは、かなり削平されたものと思われる。しかし、墳丘の北東側は自然傾斜面に近いので、本来周溝があったかどうか不明である。前方部前面は、前年に積み上げられた排土を無視すれば、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜になっており、墳丘裾も墳丘斜面にほぼ平行して直線的に見えるので、本来の形をとどめているように見える。しかし、Gトレンチの土層断面の観察では、周溝から墳丘への立ち上がりのラインと旧表土層も明確ではない。トレンチ内の土層断面では、周溝底から墳丘に続く線は、周溝底から1mほど上がるそのまま水平に続くようである。墳丘上部の土層は、白色粘土が主体でしまりもよくほぼ水平に薄い層で構築されている。しかし、墳頂部から2.5mより下部の土層は、あまりしまりがなく白色粘土の混じる土層が斜めに周溝覆土の上に続き、周溝底の線とうまくつながらないのである。もし、周溝覆土の上に流れる土層が墳丘ではないならば、当然その上の水平に積まれた土層も墳丘でないことになる。そこで、この斜めに流れる白色粘土混じりの土層のどこかに墳丘と流土の境があるものと、観察を続けたが明確なラインは見いだせなかった。今回は時間がなくこれ以上この問題を深く追求することができなかつたが、前方部前面の確認は1箇所しか行ってないので、この土層断面からだけでは前方部前面の墳丘については結論はだせないと思う。また、このような状況なので、墳丘に段築があったかどうかは確認できなかつた。

2. 周溝(PL.7 PLAN6 参照)

現地形をみる限りでは、墳丘の周囲はかなり削平されていることもあり、周溝らしい窪みは確認できない。Gトレンチ内で確認した落ち込みは、前方部前面にあることと、一番深いとこ

ろから底部穿孔土器の破片が出土したことで古墳の周溝であることに間違いない。周溝の幅は、確認できる上面で幅7.5mを計る。立ち上がりは外側がやや急で、墳丘側は緩やかな傾斜である。周溝の中央部が一段埋んでいる。覆土はしまりがよい暗褐色土であるが、最下層の土はかなり白色粘土の混じる層である。

この他にも墳丘の周囲に周溝の確認を目的として調査区を設定したが、周溝は確認できなかつた。Cトレンチでは、南の端で小砂利を含む褐色の地山が上りはじめると確認した。トレンチ内の北側は地山まで削平を受けているので、この南端の部分から北東側が削平が行われていることが確認できた。Dトレンチでは、調査区の中央で溝か塙の痕を確認した。また、トレンチの南西端で大きな落ち込みを確認した。覆土中には若干白色粘土が混じる。現在もこのトレンチの南西方で1.5m程の段差があり、以前はここから段がついていたと思われる。しかし、確認した落ち込みの方向が現在の落ち込みの方向と少し違うこともあり断言はできない。このトレンチでは周溝は確認できなかつた。前方部前面の周溝底と同じ高さで周溝があったのであれば、既に削平されて確認できなかつたことになる。Eトレンチの南西側は、3m程比高があり高くなっている。当初、このEトレンチを設定した場所は、周溝の可能性があるものと考えていたが、調査の結果自然の谷であることが確認できた。Fトレンチは、後円部前面で周溝を確認するために設定したものであるが、約30cm下げたところで褐色の小砂利混じりの地山が確認され、ここも削平されていることが判明した。トレンチ内の南東側で中世の落ち込みらしいものを確認したが、周溝は確認できなかつた。

今回の調査で周溝が確認できたのは、前方部前面だけであるが、本来は他のところにも巡っていたと思われる。ただ、この古墳の位置する場所は、北東に向かって緩く傾斜しているところであり、その部分にも周溝があったかどうかは不明である。また、平成2年に削られた前方部南西隅は、古墳築造前の地形も谷が迫っていたと思われる所以、周溝は途切れていたかもしれない。

3. 埋葬施設 (PL.15 参照)

PL.15の写真は、後円部が掘削されているところを、道路から撮影したものだそうで、埋葬施設を北ないし北東から撮影したことになる。写真の埋葬施設は、正確な寸法は不明であるが2m以上あったようだということである。写真に写し出されているのは、中央部が埋んだ木炭層である。木炭は、かなり大きいものも含んでいたようである。写真の撮影方向から考えて、この写真が墳丘の真横から撮影されたものならば、埋葬施設は墳丘の主軸に平行してはいなかつたことになる。この写真だけで、これ以上埋葬施設の詳細にふれることはできないが、今富塚山古墳の後円部墳頂下には、いわゆる木炭塚か木炭床と呼ばれる埋葬設備があったことが確認できる貴重な写真である。

IV 遺物出土状況

1. G トレンチ

底部穿孔壺型土器の破片は、前方部前面のトレンチ（G トレンチ）内の周溝最下層より若干上から出土した。接合できた6片を含め30片程が、ほぼ同じ地点から出土した。また、同一個体と思われる口縁部は、同じトレンチの周溝覆土上層から、頸部の部分はC トレンチから出土した。周溝覆土の上の粘土が集中する層からも土器の破片は多く出土しているが、胎土からみて下層から出土した底部穿孔土器と同一個体とは考えられないものが多い。また、弥生式土器の多くもこのトレンチから出土した。fig.1-2石鐵はこのトレンチから出土した。

2. その他のトレンチ

各トレンチからも、数は少ないが土器片が出している。C トレンチからは土師器と弥生式土器片が出土しているが、いずれも細辺であり原位置をとどめたものではない。A トレンチからは須恵器の壺の胴部の小片も出土している。D・E・F トレンチからは、中近世の陶器も出土している。

前方部のH トレンチからも若干の土師器片は出土しているが、墳丘に埋められた状態で出土したものはなく、またそう思える遺物もない。今回の発掘区の調査ではG トレンチで出土した底部穿孔土器がどこにおかれたものかは不明である。

3. 表 採

くびれ近くの切り通しの崖面から数片の土器を採集した。これらは古墳下層の住居跡覆土内のものと考える。また、墳丘が大きく削られた後円部の旧表層付近からも数片の土器が表採できた。なおPL.14-18の弥生式土器の口縁部は、田中新史氏が後円部削平面旧表土層付近より表採した資料である。fig.1-2の石器も表採である。

V 出 土 遺 物

1. 底部穿孔土器 (PL.13 参照)

PL.13は、G トレンチから出土した底部穿孔土器である。これらの土器の破片は胎土中に淡い黄土色の2~3mmの混合物があり、器表面は茶褐色を呈し、表面に細かい亀裂が入りはげ落ちる特徴が共通している。出土地点もほぼ同じ地点なので同一個体と考える。1は口縁部である。小さな破片ではあるが復原すると口縁部径は25.4cmになる。端部は摩滅が著しいものの稜はシ

ヤープである。口縁端部はヨコナデで仕上げられ、外に大きく開いている。内側をみると弱くハケ目(7本／1cm)が残っており、ナデで仕上げられている。2は壺の口縁部と頸部の間の傾斜変換部になるところである。破片の上方は、疑口縁となり口縁部が剥がれたことが明らかである。上面には浅いが窪みがつけられているよう、口縁部と接合をよくするためにつけられたものかもしれない。3は壺の頸部の破片である。この破片はCトレンチの出土遺物であり、他の土器片と色調が若干違うので個体は違うかもしれないが、同種の壺の破片と考える。下面は粘土が剥がれたことが明瞭であり、図のような形態をしていたと考える。4は胴部内面のハケ目(ハケ目6本／1cm)の拓影である。ハケ目がつく破片は少ないが、この破片が一番明瞭である。5は厚さから底部に近い部分の破片と考える。内外面ともナデで仕上げられているようであるが、表面がかなり荒れており明確ではない。6は底部の破片である。底部の内面は土器焼成前にヘラケズリで仕上げられている。底部の先端は非常にせまい。遺存のよい部分での計測では、底部の先端から内面のヘラケズリされている範囲は2cmほどである。内外面とも調整は明瞭でないがナデで仕上げられているものと思われる。他にも同一個体と考えられる小片があるが接合はしない。

2. 下層住居跡出土遺物 (PL.13・14参照)

住居跡の覆土付近から3片の破片を表採した。7は内外面とも剥離が著しいが小壺の破片である。8は壺の破片である(ハケ目7本／1cm)。9は弥生式土器にみられる壺の頸部から胴部にかけての部分である。上半には地に細かい繩文が施され、下の部分にはS字状に結節文が巡らされている。胎土は黄白色でごく細かい黒色粒子が混じる。外面の文様がない部分には赤彩が施されていたと思われる。

3. その他の遺物 (PL.14参照)

PL.14の上の遺物は古墳時代前期の土器を集めたものである。ほとんどが壺の胴部破片である。10は壺の口縁部である。端部がわずかに外側に開く。11は壺の頸部である。12は小片であるが胎土が白っぽいS字口縁壺の胴部と思われる(ハケ目5本／1cm)。13・14は胎土が淡い黄白色で外面の刷毛目が非常に細かい(ハケ目10本／1cm)胴部の破片である。15は一見すると叩きかと思われるような、やや粗いハケ目(ハケ目4本／1cm)のつく壺の胴部である。17は高杯の口縁部である。PL.14の下段は弥生式土器である。19は大きさからみて弥生時代の土鍤である。

報告書で紹介した土器は大きく3時期に分けることができる。それはまず弥生時代の土器群であり、次に今富塚山古墳が築造される以前の古墳時代の土師器である。それと今富塚山古墳にともなう周溝から出土した底部穿孔の壺型土器である。底部穿孔壺型土器は小破片であり、全体が明らかでないので時期の決定は困難であるが、とりあえず4世紀前半代と考えたい。

VI まとめ

本古墳は、墳丘が大きく壊され、後円部中央に存在した木炭を使用した埋葬施設も副葬品が明らかにされることなく破壊削平されてしまっている。このような古墳に対し、今回初めて調査が行われたわけである。以下本古墳の調査にあたり、気付いた点を記してまとめてかえる。

1. 墳丘 (fig.4参照)

本古墳は前述のように墳丘が大きく壊されているので、おおよその復原図を作成した (fig.4)。周溝が確認できたのは前方部前面だけなので、他の部分の墳丘幅は推測の域をでない。現在の墳丘幅の高さは、くびれ部で南西側よりも北東側の方が約1m低い。これは、本来墳丘の北東側が低くなっていたためと思われる。古墳が斜面に築造される場合、斜面の低い方を大きめに造り、後円部が真円にならない例が最近確認されている。そのような例から考えると、本古墳も後円部北側は推定線よりも若干大きく造られていたかも知れない。くびれ近くの墳丘の尾根状になっている部分は、前方部から続くスロープがついていた古墳本来の形が残っている部分なのかもしれない。前方部幅は東側が道で少し削られていると思われるが、大きくなれば改変されていないと思われる。西側は既におおきく削平されているが、後円部径から考えてあまり幅が広い前方部は復原できない。このようにして墳丘を復原してみると、前方部は後円部に比べると短い。復原できる今富塚山古墳の規模は、以下の通りである。

| 全長 | 110m | 主軸方位 | S-58°E | 参考 | (現状の高さ) |
|--------------|------|-------|--------|-----|------------------------------|
| 後円部径 | 72m | 後円部高さ | 12m | 最高点 | 26.46m 東側幅 15.88m 南側幅 17.00m |
| くびれ幅 | 24m | くびれ高さ | 6m | 最高点 | 22.10m 北東幅 15.90m 南西幅 17.30m |
| 前方部長 | 40m | 前方部高さ | 7m | 最高点 | 22.70m 周溝底 15.73m |
| 前方部幅 | 31m | | | | 25.50m (現状最大幅) |
| 後円部頂と前方部頂の比高 | | 5m | | | 3.76m (現状最高点の差) |

また、古墳の主軸方向はおおよそ南東に向くが、これは狭い丘陵の突端に築造したためと考える。墳丘は大きく改変されているので細かいことについては検討できない。しかし、本古墳の特徴の一つは後円部径に比べて前方部長が短いことである。このような特徴の古墳は、数は少ないが全国的に確認できる。東日本では、山形県南陽市稻荷森古墳に代表される前方部半截型古墳と称されたこともある東北地方の古墳や茨城県八千代町香取神社古墳も同じような墳形と考えられる古墳である。これらの古墳の築造年代は4世紀か5世紀と考えられており、今富塚山古墳も出土土器から4世紀と考えられることと合致する。今後さらに類例が増加すれば、細かい検討のできる墳形なのかもしれない。

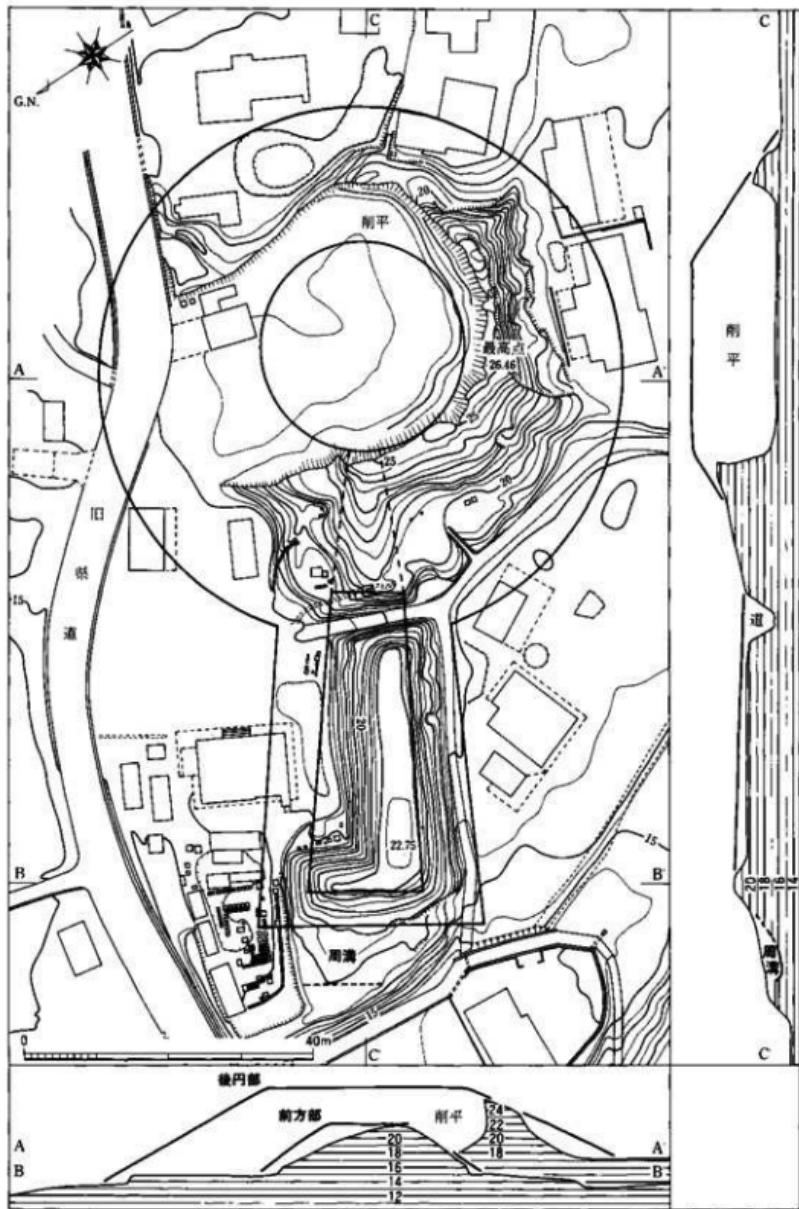


fig.4 今富塚山古墳墳丘復原図 (1:800)

2. 埋葬施設

今富塚山古墳の埋葬施設は、木炭が使用されたものであったことは写真から明らかである(PL.15参照)。そこでこの埋葬施設が、どのようなものであったかを考えてみたい。

木炭を使用した埋葬施設に、木炭櫛がある。木炭櫛という名称は、後藤守一が群馬県赤堀茶
文獻9)
白山古墳を発掘調査した際、その埋葬施設に命名したのが始まりのようである。しかし、後藤
はこの施設を木棺の外部構造ではなく木棺に代わるものと考え、本来ならば木炭棺と呼ぶべき
であるが從来この種のものを櫛と呼んでいるので木炭櫛とするとしている。しかし、これでは
木炭櫛がどのようなものなのか明らかでない。小林行雄によれば「木棺の周囲に木炭をつめた
埋葬設備を木炭櫛とよぶことがあるが、適當な語でない。…(中略)…完備した粘土櫛に対して、略式のものである…」とされている。では粘土櫛はどのようなものか、同じく小林行雄の
文獻10)
粘土櫛の説明もみておきたい。粘土櫛とは「古墳の封土の中に石室の被覆をもうけず、直接に
木棺を埋めるばあいに、木棺の周囲を厚く粘土でつつむことがある。棺の外部構造という意味
で、これを粘土櫛という。」としている。これらのことから、木炭櫛という埋葬施設は、木棺の
周囲を木炭でつつむ外部構造をしているものであることがわかる。しかし、木炭櫛と呼ばれる
埋葬施設は、発掘調査によって構造が明確にされたものは少ないので、そのためか木炭櫛と
いう語は曖昧に使用されていると思われる。ここで粘土櫛の場合を考えてみる。粘土櫛では木

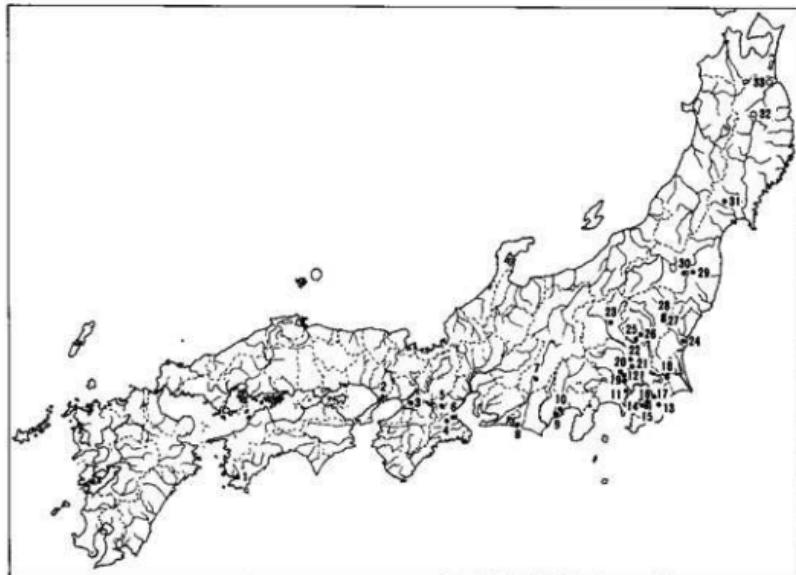


fig.5 木炭使用埋葬施設内蔵古墳位置図

| fig.5 番号 | 古 墳 名 | 所 在 地 | 墳形・規模・埋葬施設種類・棺種類・規模他 | 主な出土遺物 | 時期 |
|-------------|-----------|------------|----------------------------------|----------------------------|------|
| 1 | 曾我山古墳 | 高知県宿毛市 | 円墳約20木炭層? | 鉄文鏡 武具鏡 刀 矛 高杯 | 5世紀 |
| 2 | 園田大塚山古墳 | 兵庫県尼崎市 | 前方後円墳42木炭層 | 槍 鐵鎗 鐵 矛 馬具 | 6世紀 |
| 3 | 裏塚古墳 | 大阪府八尾市 | 円墳? (前方後円墳か) 木炭層 (土採取中に主体部有りといふ) | | |
| 4 | 前山古墳 | 三重県一志郡鴨野町 | 前方後方墳47木炭層5×2 | | 4世紀 |
| 5 | 天長山1号墳 | 三重県阿山郡伊賀町 | 円墳? 木炭層? | 鐵頭大刀? 鎌惠器 | 6世紀? |
| 6 | 木造大塚山古墳 | 三重県久居市 | 前方後方墳? 木炭層? | 瑟玉製合子 | 4世紀 |
| 7 | 蛭外道路 | 長野県下伊那郡上郷町 | 方形周溝墓 組み合せ式木炭棺? 1.1×0.6 | | |
| 8 | 学園内重宝塚古墳 | 静岡県浜松市 | 前方後円墳45木炭層3 | 椎円形鏡板 古金具 墓輪 | 6世紀 |
| 9 | マルセッコ古墳 | 静岡県静岡市 | 円墳31周溝に木炭塊を置く | 石製模造品 盒 菱形埴輪 | |
| 10 | 牛王堂山1号古墳 | 静岡県清水市 | 前方後円墳40か円墳25か木炭層5×1.5 | 劍 刀子 鏡 | 4世紀 |
| 11 | 加瀬白山古墳 | 神奈川県川崎市 | 前方後円墳87木炭層7.5×1.1 | 三角縁神獸鏡 内行花文鏡 例銘 まり 楊形銀器 茶 | 4世紀 |
| 12 | 猪江鬼塚古墳 | 東京都狛江市 | 前方後円墳48上部木炭層円4×1.8 | 金網製毛形鏡板 鏡環 | 5世紀 |
| 13 | 船満寺古墳 | 千葉県長生郡長南町 | 前方後円墳74木炭層7.5×2 | 鏡2剣 小玉 鐵鎗 8 鐵鎗 | 4世紀 |
| 14 | 君見台A・B号古墳 | 千葉県木更津市 | 円墳 | 楔形銀器 墓輪(B種横ハケ) | 5世紀 |
| 15 | 北谷古墳 | 千葉県木更津市 | 方墳3m? | なし | 4世紀? |
| 16 | 今富塚山古墳 | 千葉県市原市 | 前方後円墳110木炭層 | | 4世紀 |
| 17 | 新皇塚古墳 | 千葉県市原市 | (前方後方墳?) 粘土層 斧竹型木棺 床及び蓋に木炭 | 石鏡 珠文鏡 估製内行花文鏡 | 4世紀 |
| 18 | 大日山古墳 | 千葉県香取郡下総町 | 前方後円墳54木炭層6×0.5~1.1 | 劍 刀子 管玉 | 4世紀 |
| 19 | 一夜塚古墳 | 埼玉県朝霞市 | 円墳36木炭層 | 衝角付背挂甲 方格網鉄鏡 櫛円形鏡板付背 合葉 雪珠 | 6世紀 |
| 20 | 下小坂1号墳 | 埼玉県川越市 | 円墳26×31木炭層3.34×0.4 | 刀 刀子 鐵鎗 小玉 | 6世紀 |
| 21 | 内牧4号墳 | 埼玉県春日部市 | 木炭層 | 埴輪有り(下絶型) | 6世紀 |
| 22 | 目沼9号墳 | 埼玉県北葛飾郡杉戸町 | 円墳 | 鈴合葉 黒環首鏡 | 6世紀 |
| 23 | 赤堀茶臼山古墳 | 群馬県佐波郡赤堀村 | 前方後円墳59木炭層 | 内行花文鏡 短甲 鐵製刀子 石製模造品 变形神獸鏡 | 5世紀 |
| 24 | 津田1号墳 | 茨城県勝田市 | 前方後円墳25.5木炭層 | 刀 剣 鐵鎗 墓輪 人物埴輪 | 6世紀 |
| 25 | 十二天塚古墳 | 栃木県足利市 | 円墳? 木炭層 | 五鈴鏡2 | 5世紀 |
| 26 | 七廻り鏡塚古墳 | 栃木県下都賀郡大平町 | 円墳28木炭床 角形木棺5.49×1 | 玉體大刀 竹櫛 | 6世紀 |
| 27 | 鴉大塚古墳 | 栃木県那須郡小川町 | 前方後方墳64木炭層 木棺3.5×0.75画面に木炭 | 面文書四瓣鏡 鏡頭6 鐵斧 鐵 | 4世紀 |
| 28 | 三輪仲町遺跡1号墓 | 栃木県那須郡小川町 | 圓溝墓? 木炭床形木棺か木棺3.55×0.4 | 手状刀子 鐵鎗 剣 曲刀鋒 | 5世紀 |
| 29 | 正直23号墳 | 福島県田村郡田村町 | 円墳29木炭床 舟形木棺か5×1.1 | 石製刀子6 剑 鐵始玉 | 5世紀 |
| 30 | 東丸山遺跡 | 福島県郡山市 | 圓溝墓? 木炭床2基? 4.1×1 | | 5世紀 |
| 31 | 青塚古墳 | 宮城県古川市 | 前方後円墳80~90木炭層(不明) | 刀子 鐵鎗 | 4世紀 |
| 32 | 浮島4号墳 | 岩手県岩手郡岩手町 | 円墳13木棺を覆く木炭で包む | | 7世紀 |
| 32 | 浮島9号墳 | 岩手県岩手郡岩手町 | 円墳11木棺を覆く木炭で包む | ガラス製小玉100以上 | |
| 32 | 浮島11号墳 | 岩手県岩手郡岩手町 | 円墳9木棺を覆く木炭で包む | | |
| 33 | 黒島沢古墳 | 群馬県八戸市 | 円墳 玉石の上に木炭層 | 刀 金羅 ガラス玉 楊葉 | |
| 33 | 丹後平3号墳 | 青森県八戸市 | 円墳5棺底に木炭層 | 蒙手刀 | 8世紀 |
| 33 | 丹後平10号墳 | 青森県八戸市 | 円墳8棺底に木炭層 | 刀 | 7世紀 |
| 33 | 丹後平13号墳 | 青森県八戸市 | 円墳4棺底に木炭層 | ガラス玉 | 8世紀 |
| 33 | 丹後平15号墳 | 青森県八戸市 | 円墳9敷石の上に木炭層 | 舞鳴三葉頭大刀 鐵鎗大刀 | 8世紀 |
| 33 | 丹後平16号墳 | 青森県八戸市 | 円墳5木棺の側板部に木炭 | 楊葉劍 勾玉 切子玉 | 7世紀 |
| 33 | 丹後平20号墳 | 青森県八戸市 | 円墳6敷石の上に木炭層 | 楊葉劍 | 7世紀 |

tab.2 墓木炭使用埋葬施設内蔵古墳一覧

(埋葬施設の名称は報告されているものをそのまま載せた。ゴチックは4世紀代の古墳である。)

棺が腐朽した後でも木棺の上部を被覆している粘土は、そのままの形で残っているか、棺内に陥没しており、「…木棺の周囲を厚く粘土でつつ…」んでいたことが明きらかであり、粘土櫛と呼ばれる所以である。もし、木炭櫛も粘土櫛と同じ構造だとすると、木炭の場合は粘土と違つて固まらないので、木棺が腐った時に木棺内の空洞を保つことは困難になり木棺上部の木炭が中空の木棺内に陥没しやすいと思われる。そのため発掘調査では木棺の上部も木炭で被覆されていたかどうかがわかりにくく、木炭櫛と呼ばれる施設の構造が明確にならないのだと思う。また、被覆の木炭層が薄いことも原因しているかもしれない。

そこでまず類例から検討するために、全国の古墳から埋葬施設に木炭が使用された例を集成した。これらの例の中には、棺の壁一面に炭化物が検出されたという千葉県新皇塚古墳等も含んでいる。このような例は、木棺の外側が焼かれ炭化した状態で埋納された可能性もある。また、栃木県七廻り鏡塚古墳のように木炭床として確認されたものも含んでいる。これは前述のように木炭櫛と呼ぶ埋葬施設が明確でないので、木炭櫛の可能性のあるものとして集成したためである。木炭櫛という埋葬施設が、木棺の周囲を木炭でつつむ外部構造をしているものとするならば、畿内に多い奈良時代の墓などもその範疇にはいるかもしれないが、今回は今富塚山古墳の時期と隔たりがあるので除外し、今富塚山古墳の埋葬施設と類似する埋葬施設を中心と木炭櫛について若干の検討を行う。

本報告書に紹介した埋葬施設の写真をみると、木炭層は中央部が浅くU字状に窪んでいる。この状況は、千葉県能満寺古墳・千葉県大日山古墳・埼玉県目沼9号墳でも同じである。木炭床及び木炭櫛と報告されてきた多くの埋葬施設でみられる木炭の断面形である。しかし、神奈川県加瀬白山古墳の木炭櫛の断面図をみると、木棺を据える基礎工事の部分と思われる最下層の木炭層はほぼ水平である。また、前方後方墳である三重県銷山古墳でも木炭櫛が検出され、棺床の木炭は水平でその上に木棺を被覆していた粘土混じりの木炭層も確認でき、木棺は組合せ式木棺とされている。加瀬白山古墳の場合も木棺両横の木炭層は若干上方が開くものの直線的であることから、組み合わせ式の木棺とは考えられないであろうか。これらの例から、木炭櫛と呼ばれる埋葬施設には、舟型か割竹型の木棺と組合せ式の木棺が使用されていたことが考えられる。このうち組み合わせ式木棺が使用された場合には、上部を覆っていた木炭が確認されているようであるが、舟型か割竹型の木棺を埋納している場合は、上部の木炭層は明かでない場合が多い。木炭層中に間層や朱及び副葬品があり棺底が確認でき、木棺上部が木炭で被覆されていたことが推測できる場合は木炭櫛と呼べるが、被覆の木炭層が確認されない場合は木炭床の可能性もあると考える。今後の類例の調査に期待し、ここでは粘土床と同じように、木棺を墓坑の底面に据える場合の基礎工事として木炭床と呼べるものがある可能性を推測するにとどめておく。これら木炭を使用した埋葬施設は、今回取り上げた例では前期古墳から中期古墳または6世紀代の古墳でも確認されている。また、fig.6から木炭を使用した埋葬施設の検出

例は東日本に多いことがわかる。

以上のことから、今富塚山古墳の中央部が緩くU字状に窪む木炭層からなる埋葬施設は、木炭槻か木炭床であったと推測する。今富塚山古墳の木炭層の写真をみると、木炭層はかなり厚いようなのでその一部が木棺上部を覆っていた木炭層の可能性もあるが、写真からは判読できないので、木炭槻か木炭床か断定は避けた。

3. 底部穿孔土器

前方部前面の周溝から底部穿孔の壺型土器の破片が出土している。この土器の特徴は、焼成前に穿孔された底部の縁の部分が三角形になり端部が非常にせまく、内側が丁寧にヘラケズリで仕上げられていることにある。県内でも市原市辻田1号墳・市原市新皇塚古墳・市原市草刈D区60号跡・市原市浅間様古墳・長南町油殿1号墳・大栄町堀籠浅間山古墳等の古墳から底部



fig.6 房総半島の大型古墳及び主要前期古墳

*千葉県文化財センターが昭和57年に調査を行った一辻21mの方墳である。

穿孔土器は出土しているが、本古墳出土の土器の底部のように狭い端部をもつ土器はない。資料が細片であり、口縁部は細かい検討ができるないが、器厚も薄く、造りも丁寧なことから、この種の土器のなかでは古いものと思われる。

4. 房総の前期古墳

房総半島の古墳時代は、市原市神門古墳群の出現によって始まる。神門の古墳群は、短い前方部をもつ古

墳であり、定型的な前期古墳出現前の古墳である。他にも房総半島では、中小規模の前期の前方後方墳が造られていることが確認されているが、ここでは大型古墳に限定して房総半島の前期古墳を見ておく。大型の前期古墳は、丘陵のやや険しい半島の南側をのぞく、半島中央部から北側地域の大きな河川流域に造られている。細かくみると、養老川・村田川流域では、東京湾に近いところに古墳が造られているが、小櫃川・小糸川・一宮川・栗山川流域では、上流から中流にかけても古墳は造られている。これらの古墳のうち、発掘調査により時期が確定できる古墳として、定型的な房総最古の前方後円墳の木更津市手古塚古墳がよく知られている。手古塚古墳は、全長60mで粘土櫛内からは仿製三角縁神獸鏡・碧玉製腕飾製品・鉄製縫籠手・銅鏡・布留式土器などを出土している。今富塚山古墳と同じく埋葬施設に木炭を使用した古墳としては、太平洋に注ぐ一宮川の上流に所在する長南町能満寺古墳と利根川に面して位置する下總町大日山古墳がある。市原市大瓶浅間様古墳と市原市新皇塚古墳からも石製腕飾製品が出土している。

これら房総半島の大型前期古墳は、今までのところ墳丘に墓石をもつ古墳がないことや、普通円筒埴輪をもつ古墳がないこと、竪穴式石室も確認されていないことなど、畿内の前期古墳と比べると欠けている要素がある。未発掘の古墳で今後確認される可能性はあるが、これらは房総半島の前期古墳の特徴なのかもしれない。

| fig.6 番号 | 古 墳 名 | 所 在 地 | 墳 形 | 規 模 | 時 期 | fig.6 番号 | 古 墳 名 | 所 在 地 | 墳 形 | 規 模 | 時 期 |
|-------------|-------------|-------------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|--------|--------|--------|
| 1 | 内裏塚古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 147m | 5世紀 | 26 | 柏原2号墳 | 多古町 | 前方後円墳 | 85m | 4世紀 |
| 2 | 純崎天神山古墳 | 市原市 | 前方後円墳 | 130m | 4世紀 | 27 | 柏原1号墳 | 多古町 | 前方後円墳 | 80m | 4世紀 |
| 3 | 高柳銚子原古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 130m | 5世紀 | 28 | 能満寺古墳 | 長南町 | 前方後円墳 | 74m | 4世紀 |
| 4 | 三之分目大塚古墳 | 小見川町 | 前方後円墳 | 124m | 5世紀 | 29 | 水神山古墳 | 我孫子市 | 前方後円墳 | 69m | 4世紀 |
| 5 | 稚荷森古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 120m | 6世紀 | 30 | 瀧台古墳 | 千葉町 | 前方後円墳 | 67m | 4世紀 |
| 6 | 三条塚古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 119m | 6世紀 | 31 | 大戸天神台1号墳 | 佐原市 | 前方後円墳 | 67m | 4世紀 |
| 7 | 椎現塚古墳 | 松尾町 | 前方後円墳 | 117m | 7世紀 | 32 | 大覚寺山古墳 | 千葉市 | 前方後円墳 | 63m | 4世紀 |
| 8 | 今富塚山古墳 | 市原市 | 前方後円墳 | 110m | 4世紀 | 33 | 坂戸神社古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 63m | 4世紀 |
| 9 | 結萬ニ子原古墳 | 市原市 | 前方後円墳 | 110m | 5世紀 | 34 | 平吉原古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 60m | 4世紀 |
| 10 | 飯難塚古墳 | 夷津市 | 前方後円墳 | 109m | 4世紀 | 35 | 大日山古墳 | 下総町 | 前方後円墳 | 58m | 4世紀 |
| 11 | 冥地淡瀬御社古墳 | 夷津市 | 前方後円墳 | 105m | 4世紀 | 36 | 道祖神御古墳 | 君津市 | 前方後円墳 | 60m | 4世紀 |
| 12 | 稚荷山古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 105m | 6世紀 | 37 | 潮ノ口向合8号墳 | 浦ヶ浦市 | 前方後方墳 | 51m | 4世紀 |
| 13 | 脚前鬼塚古墳 | 千葉町 | 前方後円墳 | 105m | 6世紀 | 38 | 駒久保10号墳 | 君津市 | 前方後方墳 | 48m | 4世紀 |
| 14 | 九条塚古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 103m | 6世紀 | 39 | 駒久保6号墳 | 君津市 | 前方後方墳 | 42m | 4世紀 |
| 15 | 青木龜塚古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 103m | 6世紀 | 40 | 七里裏塚古墳 | 千葉市 | 円墳 | 54m | 4世紀 |
| 16 | 紙淵大摩山古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 100m | 5世紀 | 41 | 大庭浅間様古墳 | 市原市 | 円墳 | 52m | 4世紀 |
| 17 | 金鉢塚古墳 | 木更津市 | 前方後円墳 | 95m | 7世紀 | 42 | 鶴塚古墳 | 印西町 | 円墳 | 44m | 4世紀 |
| 18 | 油雞1号墳 | 長南町 | 前方後円墳 | 94m | 4世紀 | 43 | 新皇塚古墳 | 市原市 | 前方後方墳? | 80m? | 4世紀 |
| 19 | 弁天山古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 93m | 5世紀 | | | | | | |
| 20 | 駿遊山古墳 | 市原市 | 前方後円墳 | 91m | 4世紀 | | | | | | |
| 21 | 古軍塚古墳 | 富津市 | 前方後円墳 | 90m | 6世紀 | | | | | | |
| 22 | 北野天神山古墳 | 市原市 | 前方後円墳 | 90m | 5世紀 | | | | | | |
| 23 | 西ノ台古墳 | 成東町 | 前方後円墳 | 90m | 6世紀 | | | | | | |
| 24 | 白山神社古墳 | 君津市 | 前方後円墳 | 90m | 4世紀 | | | | | | |
| 25 | 殿塚古墳 | 芝山町 | 前方後円墳 | 89m | 6世紀 | | | | | | |

tab.3 房総半島の大型古墳及び主要前期古墳一覧

(25番までは房総の大型古墳をならべたが、26番からは前期古墳に限った。なお、古墳の改変が著しい場合の規模は、復原値である。ゴチックは4世紀代の古墳である。市原市新皇塚古墳の規模は、方墳系ではあるが確実に前方後方墳と認定はされていない。)

5. 姉崎古墳群 (fig.7参照)

fig.6に示したように、房総半島にはいくつか大型古墳の集中する地域がある。姉崎古墳群もそのひとつである。本書で姉崎古墳群と呼ぶのは、市原市北西部の東京湾に近い養老川南岸の台地及びその周辺に所在する古墳群である。今まで姉崎古墳群というと姉崎天神山古墳と姉崎ニ子塚古墳周辺の古墳群に限定して呼ばれることが多かったが、本書ではもう少し広い範囲の古墳を姉崎古墳群として扱う。その範囲は、西は境川で分断される台地先端に所在した山王山古墳とし、東は大型古墳としては1基離れているが今富塚山古墳までとする。今富塚山古墳まで含めた理由は、この古墳の築造が東京湾に近いところに所在する大型の古墳よりも古いと考えられることと、中間地域にもかなり古墳が存在するからである。

はじめに、この地域の首長墓の変遷からみておく。この地域で一番古い古墳は、今富塚山古墳と考える。今富塚山古墳の年代については、今回の調査で出土した底部穿孔土器が少量であり、断言はできないが、4世紀前半と考えている。次の首長墓は、姉崎天神山古墳か駿遊山古墳^{文獻22}と思われる。両古墳とも、後円部の高さのわりに前方部が低く前期古墳であることは間違いないと思われるが、発掘調査が行われていないので確定はできない。また、今富塚山古墳の前方部長は、墳丘全長からみるとかなり短いが、天神山古墳と駿遊山古墳も、前方部長は後円部径よりも短いようである。5世紀にはいると姉崎ニ子塚古墳が台地上ではなく、低地の砂丘列

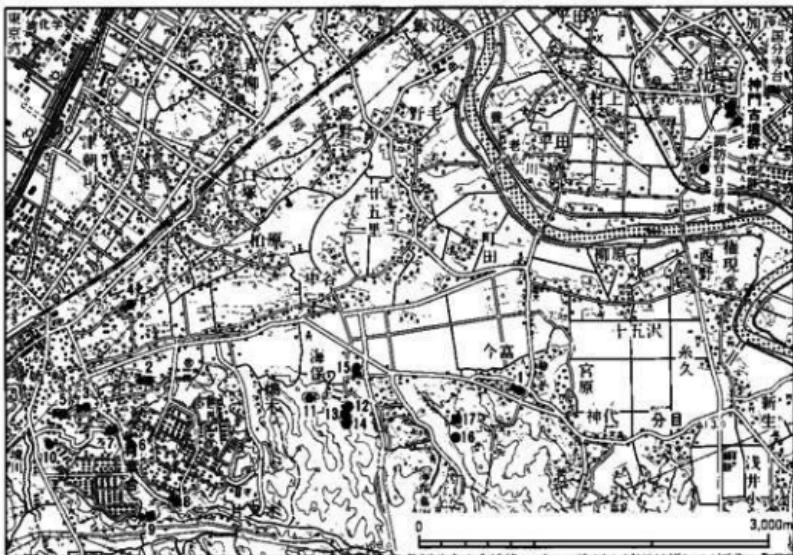


fig.7 姉崎古墳群主要古墳分布図 (1:50,000)

の上に造られる。姫崎ニ子塚古墳は埋葬施設の調査が行われて、直弧文の書かれた石枕・馬具・垂飾付耳飾等が出土しており、5世紀前半から中頃の築造と考えられる。後円部径と前方部長はほぼ同じで、1mほど後円部頂の方が前方部頂よりも高い。6世紀になると、次の首長墓と考えられる山王山古墳が、再び台地の上に造られる。山王山古墳は、銀装の環頭大刀や冠・胡蝶など豊富な副葬品で知られる6世紀前半の古墳である。山王山古墳に続く首長墓は、原1号墳と考える。原1号墳は埴輪をもち、埋葬施設が明確ではないが大刀が1本出土している。大刀には鍔がつき一部銀製の金具が付着している。鶴窪古墳は確認調査が行われているが、墳丘規模は明確ではないものの、60mクラスと考えられる。出土した埴輪から6世紀後半の築造と考える。前期古墳である天神山古墳と駿迦山古墳は台地の北端に位置し、山王山古墳は台地の西端に所在する。原1号墳と鶴窪古墳は、東京湾から見るとやや奥まった台地の中央部に造られている。そしてさらに奥まった台地の際に環頭古墳がある。環頭古墳は、発掘調査が行わ

| fig.7 番号 | 古 墳 名 | 墳 形 | 規 模 | 時 期 | 備 考 | fig.7 番号 | 古 墳 名 | 墳 形 | 規 模 | 時 期 | 備 考 |
|-------------|-----------|-------|------|-----|---------|-------------|-----------|-------|------|------|-------------------------------|
| 1 | 今富塚古墳 | 前方後円墳 | 110m | 4世紀 | 本 報 告 | 11 | 海 保 大 墓 | 円 墳 ? | 60m? | 4世紀? | 未 調 査 |
| 2 | 姫崎天神山古墳 | 前方後円墳 | 130m | 4世紀 | 未 調 査 | 12 | 海 保 1 号 墳 | 円 墳 | 10m | 4世紀 | 1967年調査 |
| 3 | 駿 駿 山 古 墳 | 前方後円墳 | 91m | 4世紀 | 未 調 査 | 13 | 海 保 2 号 墳 | 円 墳 | 11m | 4世紀 | 1967年調査 |
| 4 | 姫崎ニ子塚古墳 | 前方後円墳 | 110m | 5世紀 | 1952年調査 | 14 | 海 保 3 号 墳 | 円 墳 | 24m | 4世紀 | 1967年調査 |
| 5 | 姫崎山王山古墳 | 前方後円墳 | 70m | 6世紀 | 1953年調査 | 15 | 内 出 古 墳 | 前方後円墳 | 45m | 5世紀 | 未 調 査 |
| 6 | 原 1 号 墳 | 前方後円墳 | 80m | 6世紀 | 1981年調査 | 16 | 新 山 1 号 墳 | 円 墳 | 25m | 6世紀 | 1989年調査 |
| 7 | 鶴 窪 古 墳 | 前方後円墳 | 60m | 6世紀 | 確認調査有 | 17 | 長 墓 古 墳 | 方 墳 | 30m | 7世紀 | 1991年調査 |
| 8 | 環 頭 古 墳 | 前方後円墳 | 45m | 6世紀 | 未 調 査 | | | | | | (発掘調査が行われていても報告がなく不明なものは省いた。) |
| 9 | 六孫王原古墳 | 前方後方墳 | 45m | 7世紀 | 1970年調査 | | | | | | |
| 10 | 富士見塚古墳 | 円 墳 | 25m | 5世紀 | 1963年調査 | | | | | | |

tab.4 姫崎の主要古墳

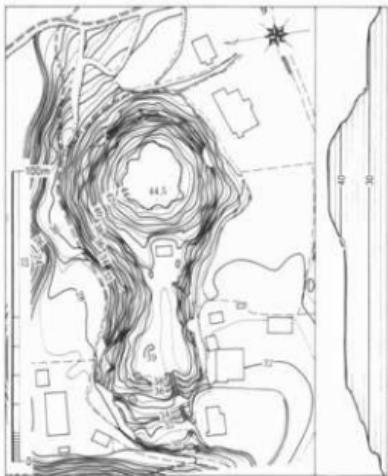


fig.8 姫崎天神山古墳埴丘測量図 (1:2,000)
(岡田とも一部修正し、再トレスしたものである。)



fig.9 姫崎ニ子塚古墳埴丘測量図 (1:2,000)
(岡田とも一部修正し、再トレスしたものである。)

れてなく時期は不明であるが、近くに古墳時代終末期の前方後方墳である六孫王原古墳があることなどから、この地域最後の前方後円形の首長墓と考えられる。全長は45mほどである。六孫王原古墳は、全長45.5mの前方後方墳である。文獻印最近市原市国分寺台の調査でも、終末期の前方後方墳が確認されており、古墳時代終末期の墳形が前方後方形であることはこの地域の特徴である。以上が姪崎地区の首長墓の順序と考える。ただ、海保大塚の評価により、変動も考えられる。文獻印海保大塚は、この地域で一番標高が高い台地に所在する。現在6段で構成されており、最下段とその上段が六角形で3段目は円形、その上の3段は四角形という特異な形態をしている。最下段の周囲は少し窪んでおり、周溝状に見える。この部分から塚の最高点までの高さは約10mある。海保大塚は、近世の出羽三山信仰の対象として造られたものであるが、原形が古墳であってそれを改変して民間信仰の対象にしている可能性もある。仮に大塚が古墳ならば、3段目の円形の部分だけが本来の古墳の形をとどめており、古墳の規模は径が45m高さは4m以上の前期から中期の円墳と推定されている。しかし、古墳の規模が塚基底部の対角線最大長に復原できるなら、海保大塚は径60mクラスの大型円墳になる。また、古墳の時期は、台地先端の最高所に位置することと、海保古墳群の年代に近いとするならば4世紀から5世紀頃と考えられる。その場合には、前述の首長墓の系列にも入る可能性もある。

この他にも内容がわかる中小規模の古墳がある。今富塚山古墳の西方500mの地点に、前述の長老塚古墳と新山1号墳が所在する。さらに西方の海保塚山東の丘陵上に所在する海保古墳群は、30mクラスの円墳を含め一部発掘調査が行われ、4世紀後半の築造と考えられる。海保古墳群の台地の北側の低丘陵上に内出古墳がある。改変が著しいが全長45mクラスの前方後円墳である。B種横ハケのつく埴輪片が表採されており、5世紀代の古墳と考えられる。文獻印東京湾に近い台地の古墳のうち富士見塚古墳は、径25mの円墳で胡蝶や小型仿銅鏡が出土している。また、消滅した古墳も多く、ニ子塚古墳の近くには數基の前方後円墳もあったようである。原1号墳の近くにも粘土櫛が2基検出されたという木戸塚古墳や、切石積みの横穴式石室を埋葬施設にもち、二重周溝を巡らした方墳の徳部台古墳などもあった。

このようにこの地域には多くの古墳が存在するが、この中で一番古い定型的な古墳は、今富塚山古墳でないかと考える。今まで養老川南岸では、神門古墳群のような出現期古墳は知られていない。反対に国分寺台には大型の前方後円墳はない。このことから、今富塚山古墳の被葬者こそが、養老川流域を最初にまとめた首長ではないかと考える。この地域最初の首長墓が今富地区に造られたのは、この場所が養老川が東京湾に向かって大きな沖積平野を形成する基部に当たる地点だからと思う。また、先の首長墓系列の中では、姪崎ニ子塚古墳までが養老川流域で当時最大規模の前方後円墳である。しかし、6世紀になると古墳の規模・副葬品からも姪崎地区的古墳に対抗しうる江古田金環塚古墳等も養老川上流に現われることから、姪崎の大型古墳の被葬者が養老川流域全体を掌握できたのは、5世紀代までではないかと考える。

6. 結語

今回の調査は、墳形の確認に主眼をおき、墳丘測量図の作成と発掘調査を行った。発掘調査の結果、周溝が確認できたのは前方部前面だけである。他の地点では、墳丘裾がかなり削平されおり周溝は確認できなかった。また、前方部前面の周溝底からは、底部が焼成前に穿孔された壺型土器の破片が出土した。この周溝をもとに墳丘図から古墳を復原すると、全長は約110mになる。後円部もかなり大きかったようで径72mくらいに復原でき、現在道路になっている部分まで墳丘はあったと思われる。前方部は長さ40mほどになる。後円部がかなり大きく復原できるわりには、前方部は短い。これは今富塚山古墳の墳丘の特徴である。全国的にみると、同じように前方部が後円部に比べて短い前方後円墳は各地にある。しかし、このことがどのような意味を持つのかは明確でない。

本古墳の築造時期は、墳形・出土した底部穿孔土器・既に掘削されてしまった埋葬施設などから4世紀の前半頃と考える。県内の前期古墳の中では、壺型土器からは油殿1号墳よりは古く、似たような埋葬施設をもつ能満寺古墳に近い時期と考えたい。

本古墳は、本来全長約110m・後円部径約72m・高さも12mを越えるような大型の前方後円墳であった。しかし、前方部は寺や墓地の拡張のために、北東側半分が古くに削平されてしまっている。昭和30年代まで形をとどめていた後円部も、昭和41年に土取りにより掘削されてしまった。その際に後円部中央墳頂下で、中央部が寝んだかなり幅のある木炭層が確認されている。掘削時の写真を見ると、おそらくこの木炭層は埋葬設備の木炭櫛か木炭床の一部であったと思われる。残念ながら埋葬施設は調査されることなく掘り崩されてしまい、一品の副葬品も発見されていない。これだけの規模を有する大型の前方後円墳であるにもかかわらず、30年前とはいえ、後円部が土取りのために調査もせずに削平されてしまったことは誠に残念なことである。また、くびれ部には道がつけられ、自動車が通るようになると後円部と前方部は完全に分断されてしまった。現在今富塚山古墳は、あちこちが削られ築造当時の古墳の面影を残すところは少なく、一瞥しただけでは、全長110mの前方後円墳には見えない。

今回の調査でこの古墳が、房総半島では最も古い定型化した大型の前方後円墳の一つであることが明かとなった。神門古墳群の出現に代表される古墳時代の幕開けは、はじめは狭い地域内での新しい権力者の誕生でもあった。その後権力を手中にした首長は、版図を拡大していくと思われ、東京湾に流れ込む養老川流域をも掌握したものと思われる。今富塚山古墳の被葬者こそ、その最初の首長ではなかったかと考える。その後5世紀代までは、姪崎地区の首長によって養老川流域はまとめられていたと思われる。

最後に、今回の調査の結果が、姪崎地区の古墳及び房総の古墳文化の解明の一助になることを祈ってまとめとする。

文 献

- (1)「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－」市原市教育委員会 1987年
- (2)『千葉県記念物実態調査報告書 I－昭和48年～53年度－』千葉県教育庁文化課 1980年
- (3)『千葉県記念物実態調査報告書』II 千葉県教育委員会 1990年
- 大場磐雄・龜井正道「上総国姫ヶ崎二子塚古墳発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第3号 日本考古学会 1951年
- (4)田中新史「神門3・4・5号墳と古墳の出現」『邪馬台国時代の東日本』 国立歴史民俗博物館 1991年
- (5)田中新史「市原市神門4号墳の出現とその背景」『古代』63 早稲田大学考古学会 1977年
- 田中新史「出現期古墳の理解と展望－東国神門5号墳の調査と関連して－」『古代』77 早稲田大学考古学会 1984年
- (6)滝口宏ほか『「王賜」銘鉄劍概報』市原市教育委員会 1987年
- (7)吉野一郎ほか『稻荷森古墳』南陽市教育委員会 1989年
- (8)西野元・岩崎卓也ほか『古墳測量調査報告書』I 筑波大学 歴史・人類学系 1991年
- (9)後藤守一「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」帝室博物館 1933年
- (10)水野清一・小林行雄ほか『図解考古学辞典』東京創元社 1982年
- (11)斎木勝ほか『市原市菊間遺跡』房總資料刊行会 1974年
- (12)大和久義平『七重り鏡塚古墳』大平町教育委員会 1974年
- (13)大塚初重「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』3 東京考古学会 1949年
- (14)市毛勲ほか『大日山古墳』大日山古墳調査団 1970年
- (15)高橋一夫ほか『目沼8・9号墳』杉戸町教育委員会 1981年
- (16)柴田常憲・森貞成『日吉加瀬古墳』三田史学会 1953年
- (17)伊勢野久好「一志郡鳩野町中村水系の大型古墳について」『三重考古学研究』2 三重考古学講話会 1985年
- (18)米田耕之助「根田遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人市原市文化財センター 1986年
- (19)浅利幸一「(大坂)浅間様古墳」『市原市文化財センター年報 昭和59年度』財団法人市原市文化財センター 1985年
- (20)滝口宏・市毛勲「千葉県長生郡長南町油殿古墳群の墳丘周辺発掘調査概報」長南町教育委員会 1975年
- (21)福間元ほか『堀築浅間古墳』堀築浅間古墳群調査会 1984年
- (22)杉山晋作「千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報」『古代』56 早稲田大学考古学会 1973年
- (23)小出義治・甘粕健・久保哲三ほか『上総山王山古墳発掘調査報告書』上総山王山古墳発掘調査団 1980年
- (24)大場磐雄ほか『原1号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会 1970年
- 越川敏夫ほか『市原市姫崎・原1号墳周辺遺址及び集落跡の調査』原遺跡調査会 1984年
- (26)中村恵次・沼沢豊・田中新史「千葉県市原市六孫王原古墳」『古墳時代研究』II 古墳時代研究会 1975年
- (27)杉山晋作ほか『海保大塚遺跡の測量調査』『関東における終末期古墳の研究』 1990年
- (28)中村恵次ほか『南大広遺跡・海保古墳群』市原市教育委員会 1968年
- (29)中村恵次「千葉県市原市富士見塚古墳」『日本考古学年報』16 日本考古学協会 1968年
- (30)永沼律朗「江古田金環塚古墳」市原市教育委員会 1985年

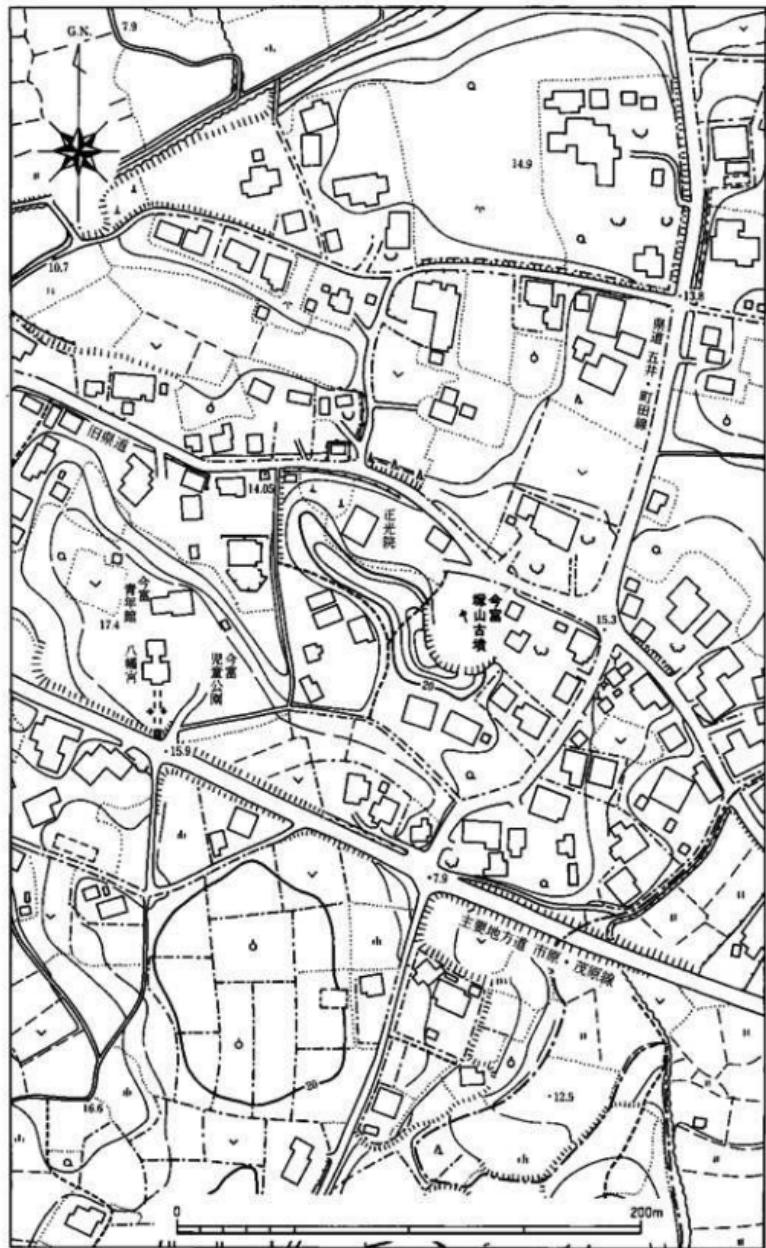
図版・図面

1. 遺構写真の対向ページには、関連する墳丘及び調査区の実測図を示した。
2. 遺物写真の番号は、対向ページの遺物番号と一致する。一部対向ページに実測図がなく、別のページにあるものもある。
3. 遺構写真の撮影方向と細部の測量図の位置は、略図に示した。
4. 遺構実測図地山の横線は、すべて水平線である。



空からみた今富塚山古墳周辺の地形
(白は古墳の位置を示す。平成3年1月6日撮影)

PLAN 1 周辺地形測量図

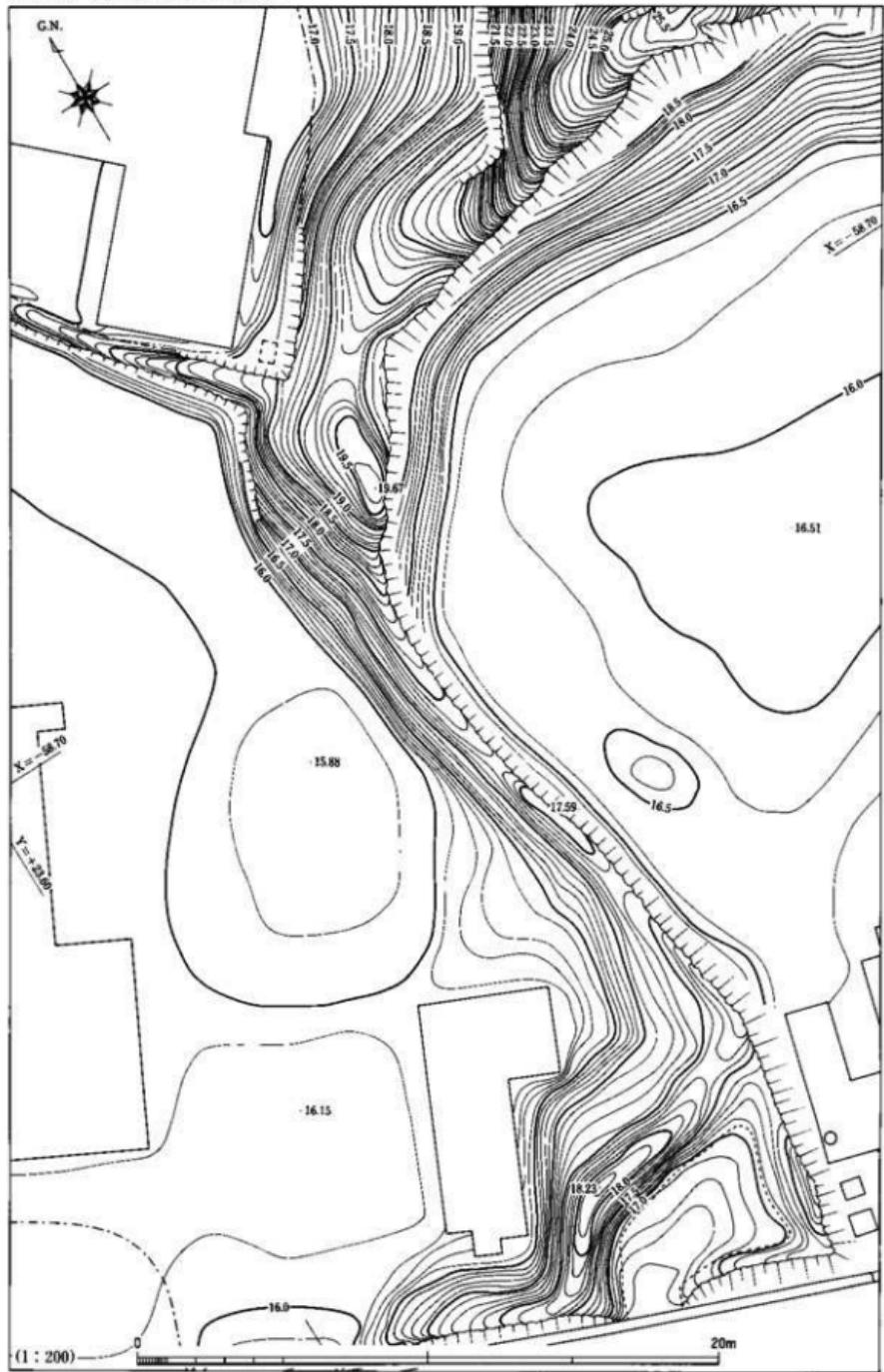


(1 : 2,500)



後田部のある今富原山町
(位置記号の位置を示す。昭和36年9月26日撮影)

PLAN 2 填丘測量図後円部細部



1. 前方部上空から



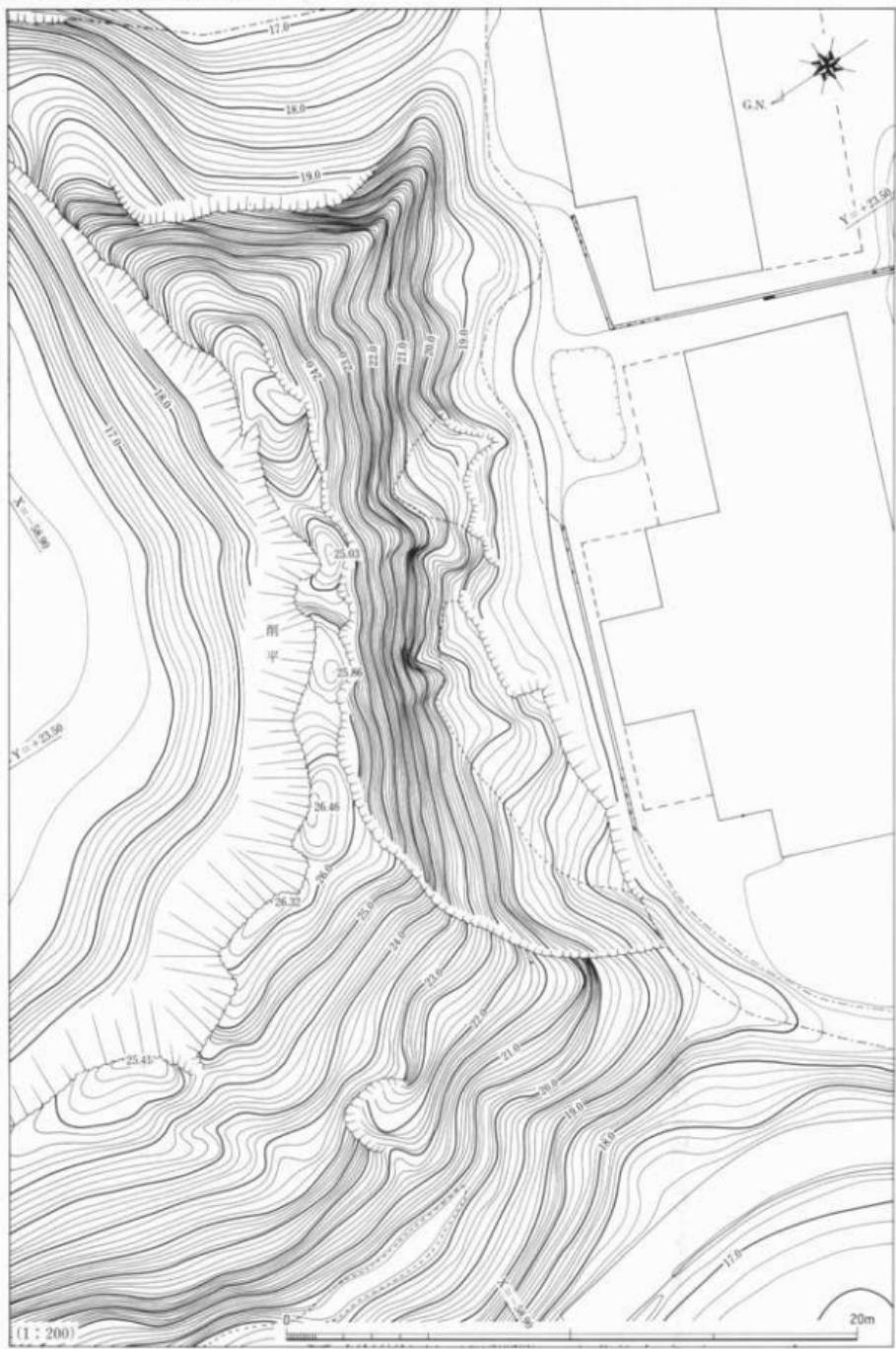
2. 古墳上空から



3. 北東方上空から
(調査時撮影)



PLAN 3 塗丘測量図後円部細部



空中写真 2

PL 4

1. 東方上空から



2. 北西方上空から

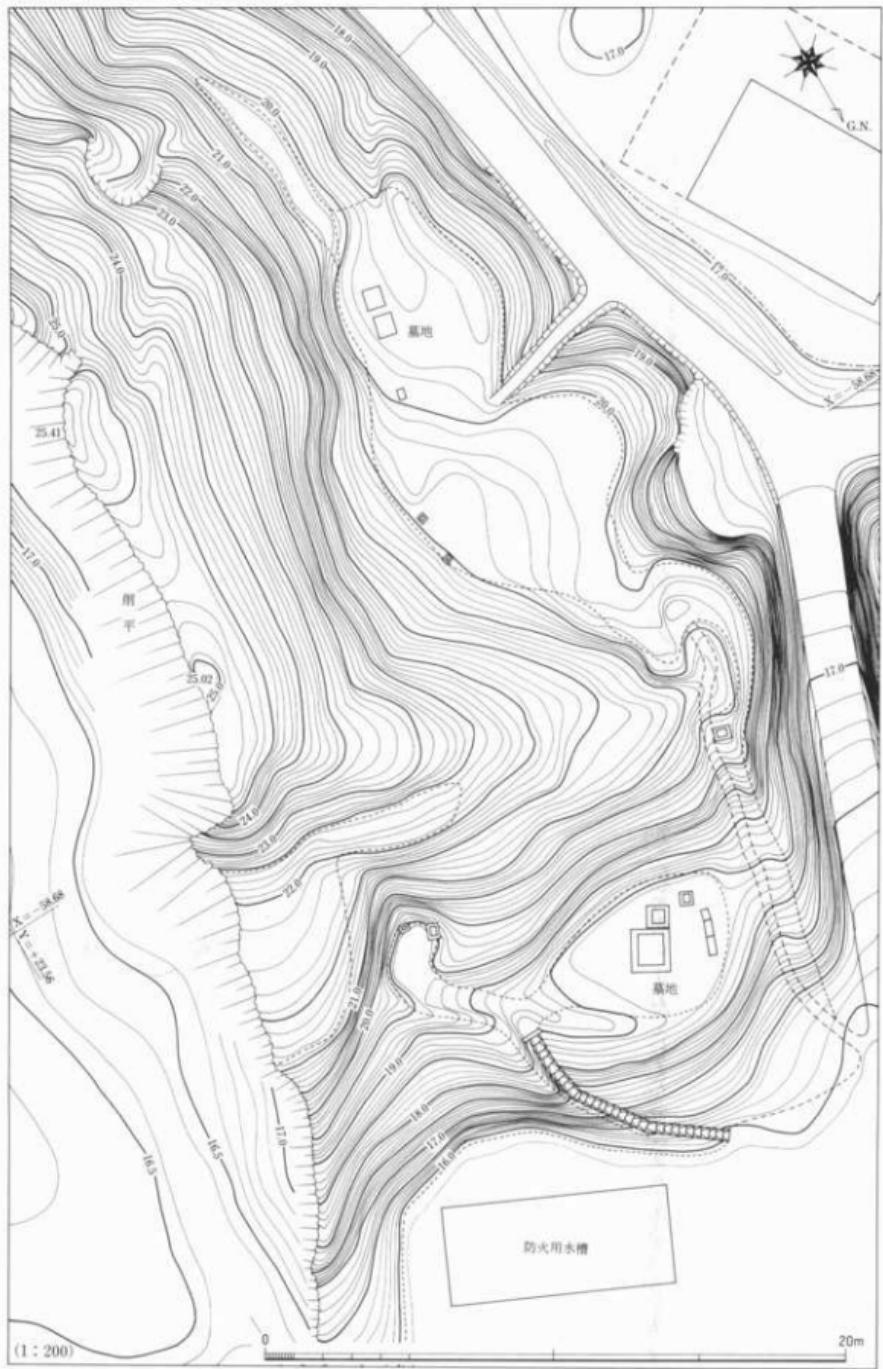


3. 西方上空から
(調査時撮影)



3

PLAN 4 墳丘測量図後円部細部



1. くびれ部の道
北東から



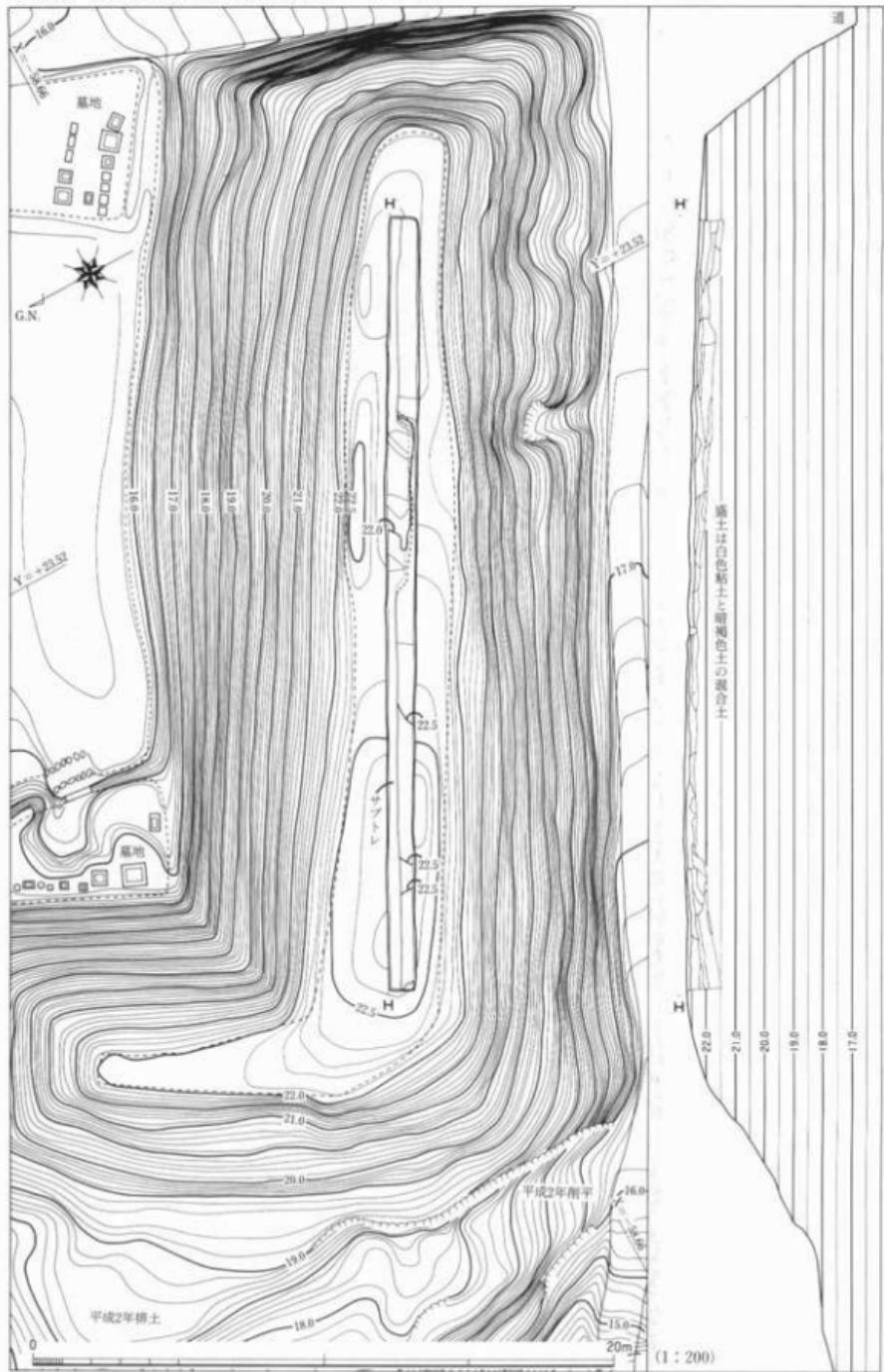
2. 墳丘削平状況
東から



3. 前方部からみた後円部
北西から



PLAN 5 墳丘測量図前方部細部及びHトレンチ



1. 前方部前面
北から



2. 前方部墳頂
北から

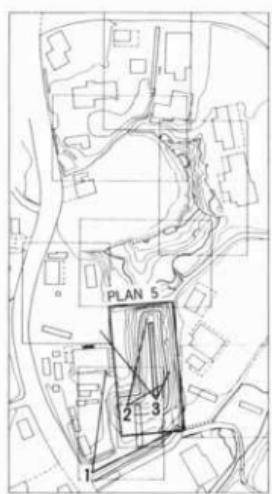


2

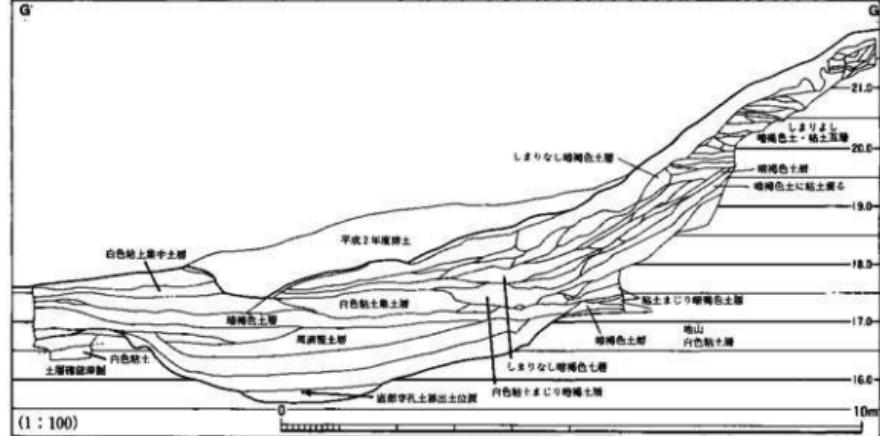
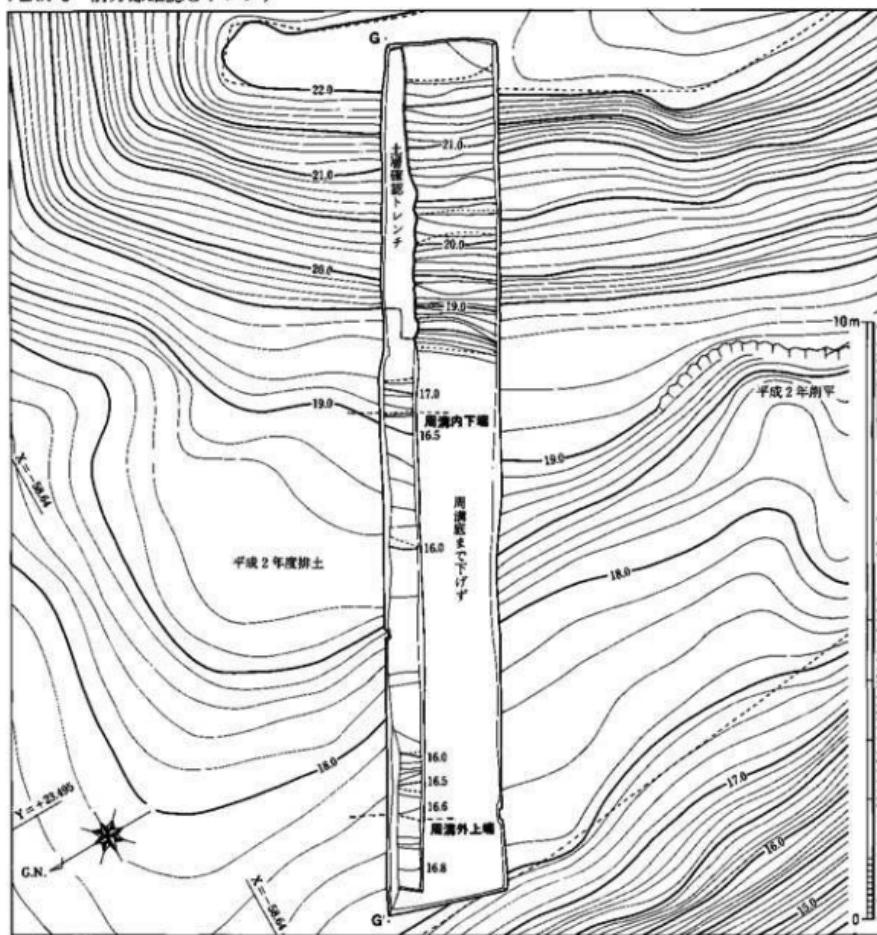
3. 前方部墳頂(H)トレンチ
北西から



3



PLAN 6 前方部確認Gトレーニチ



1. 墳丘盛土
南西から



2. 周溝内側立上がり
南西から



3. 周溝発掘状況
北西から



PLAN 7 前方部北方Cトレンチ



1. 削平南西端
北東から



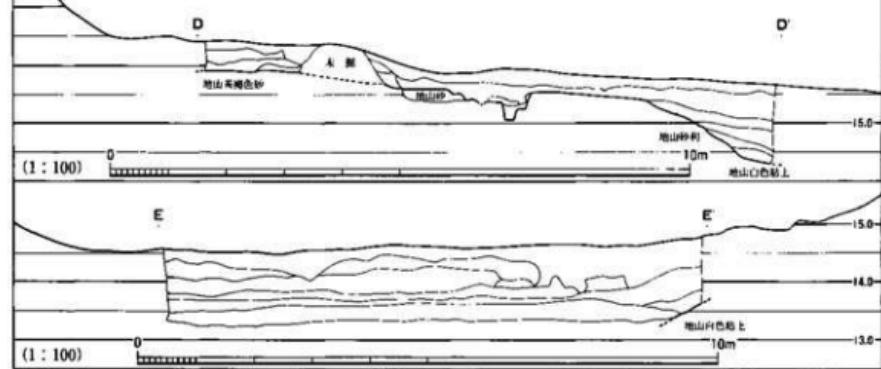
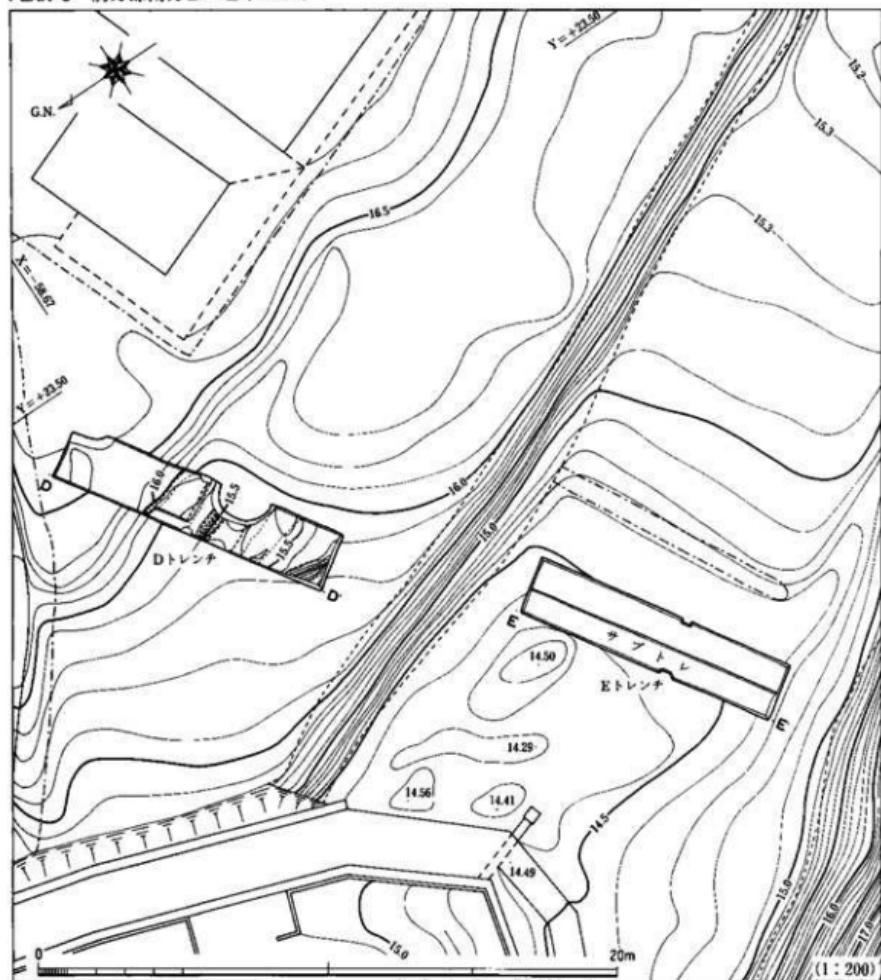
2. 調査区及び土層
南から



3. 前方部前面
北西方上空から



PLAN 8 前方部南方D・Eトレンチ



前方部南西方
(D・E)トレンチ

1. Eトレンチ発掘状況
南から



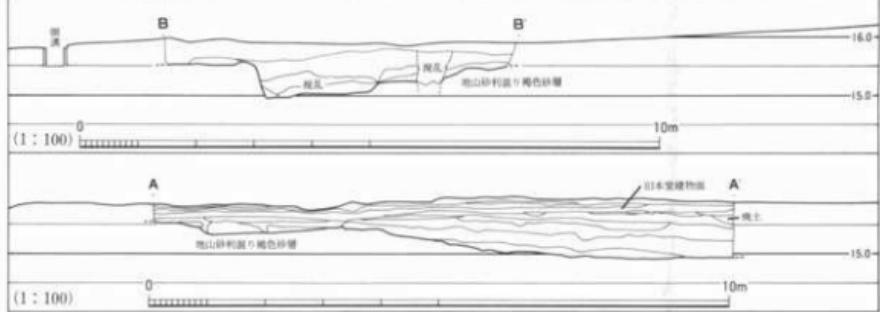
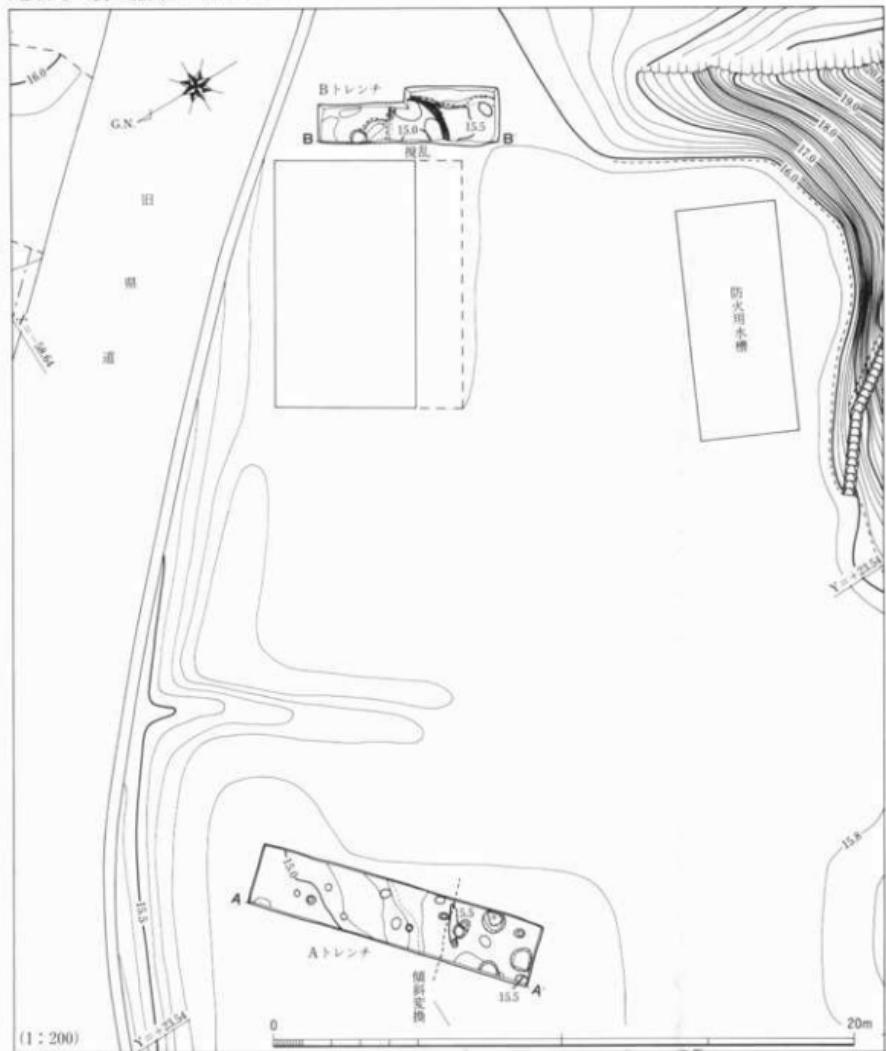
2. Dトレンチ発掘状況
南西から



3. Dトレンチ
南西端落ち込み
南から



PLAN 9 墳丘北側A・Bトレンチ



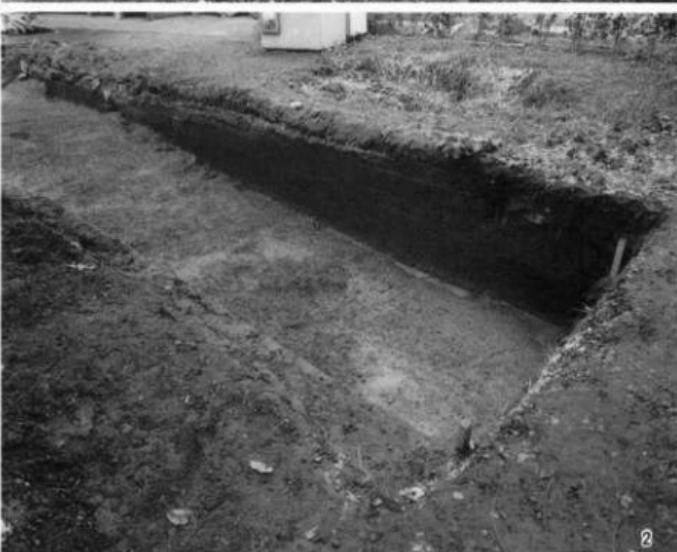
墳丘北側
(A・B)トレンチ

PL. 10

1. Aトレンチ発掘状況
南から



2. Aトレンチ土層断面
東から

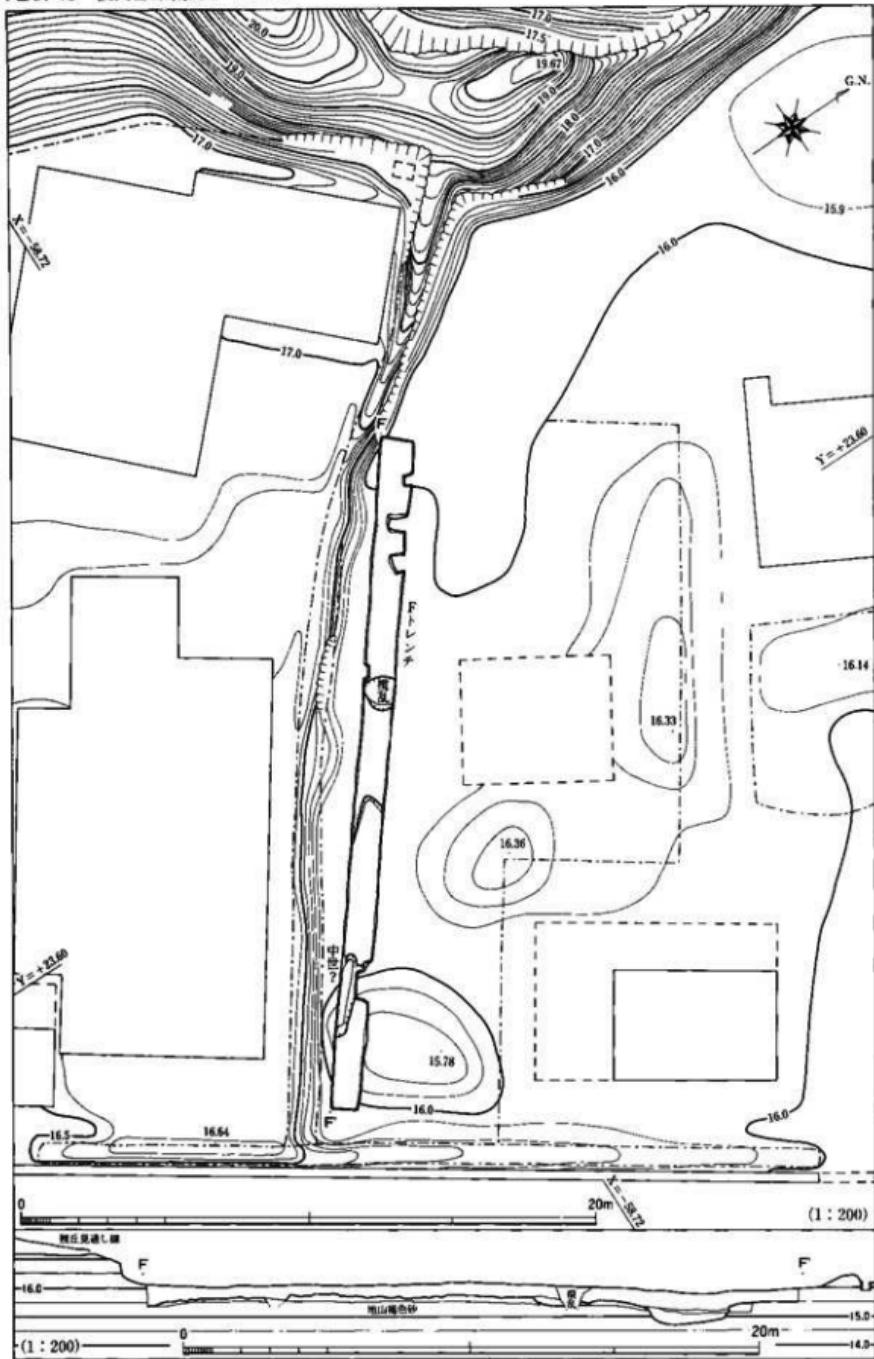


3. Bトレンチ発掘状況
南から



3

PLAN 10 後円部東南方Fトレンチ



1. 発掘状況
南東から



2. 中世遺構検出状況
東から



PLAN 10



1. 後円部削平状況
東から

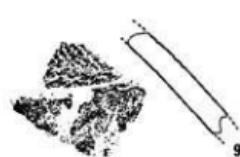
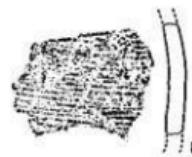
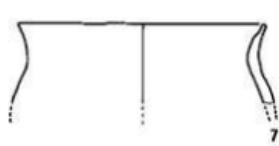
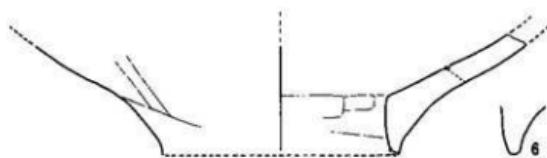
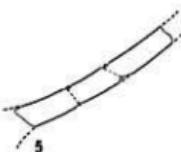
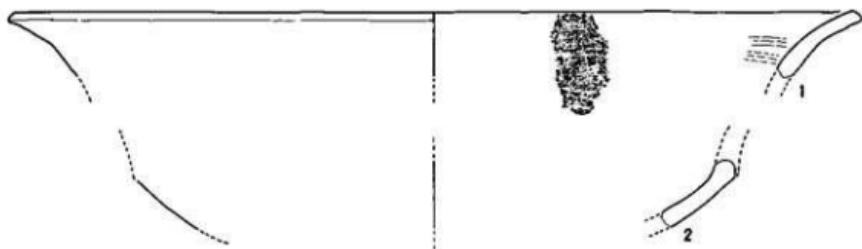


2. くびれ部切り通し断面
南東から

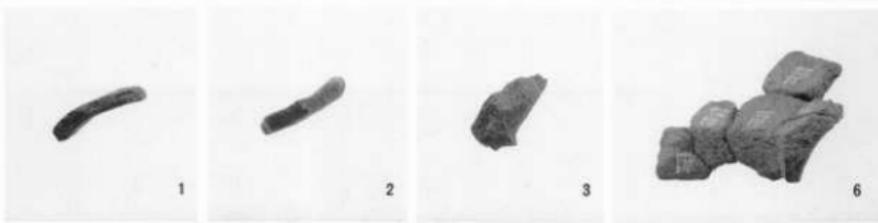
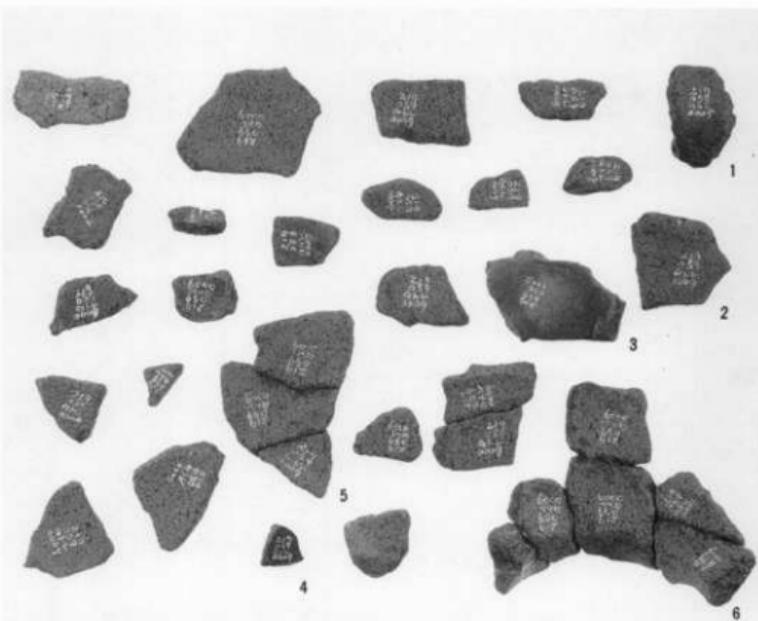
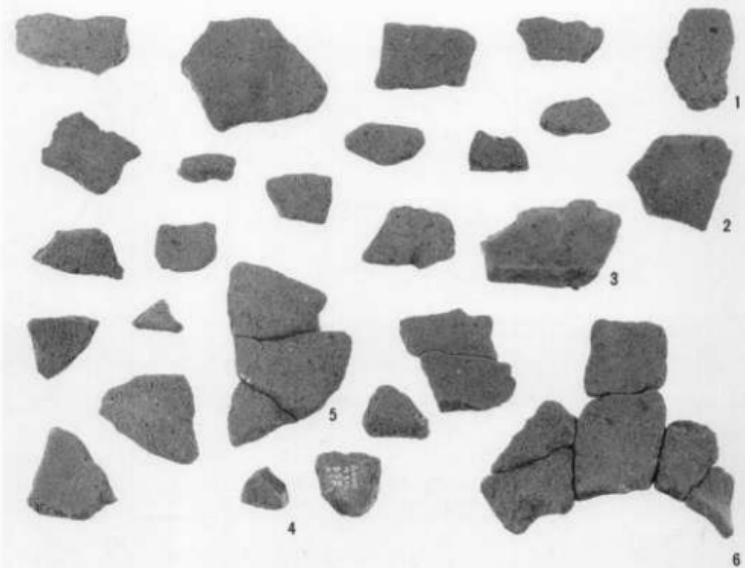


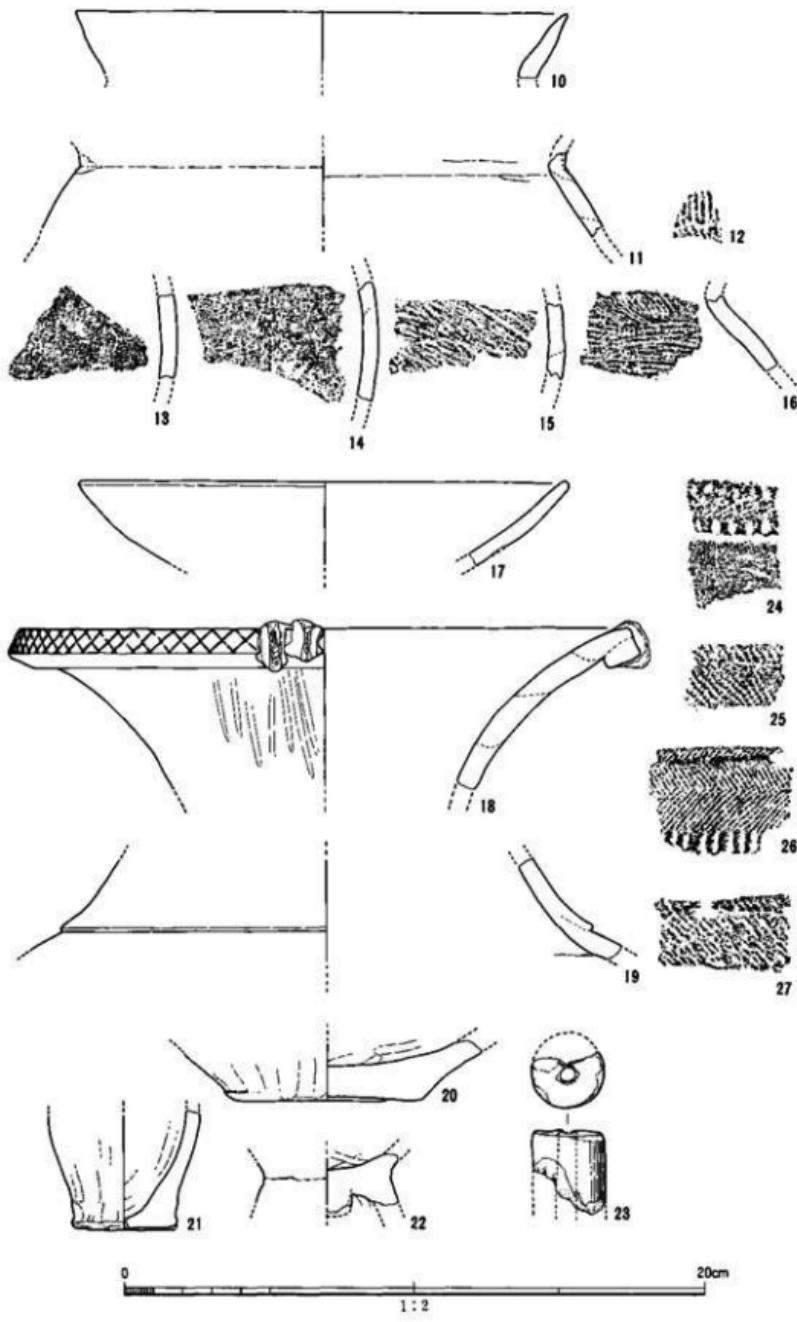
3. くびれ部切り通し
東から

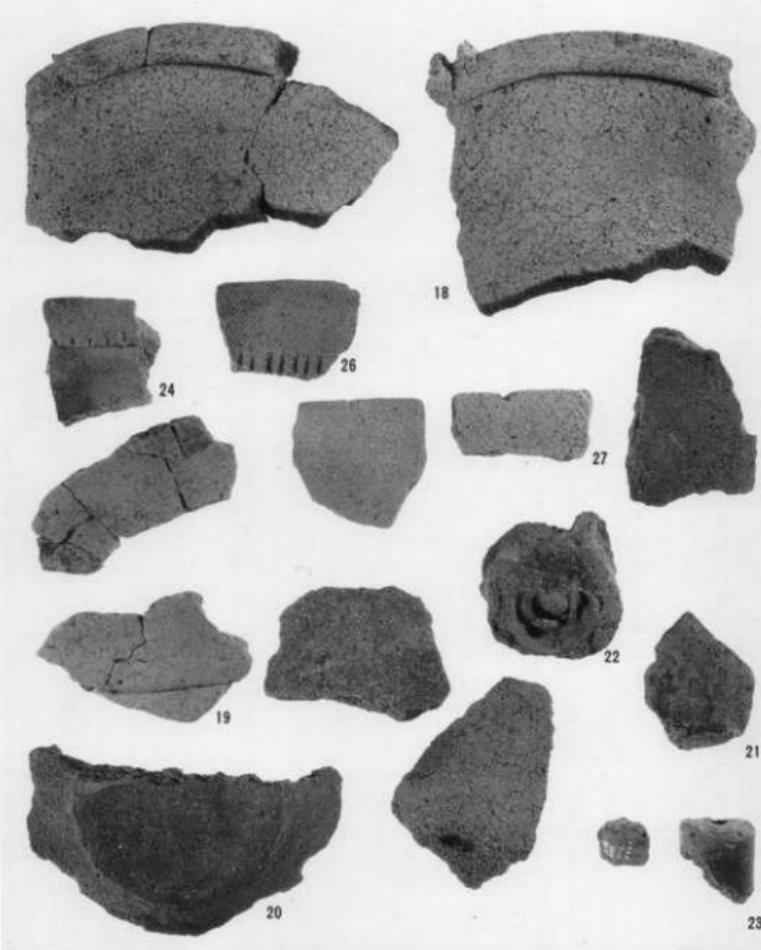
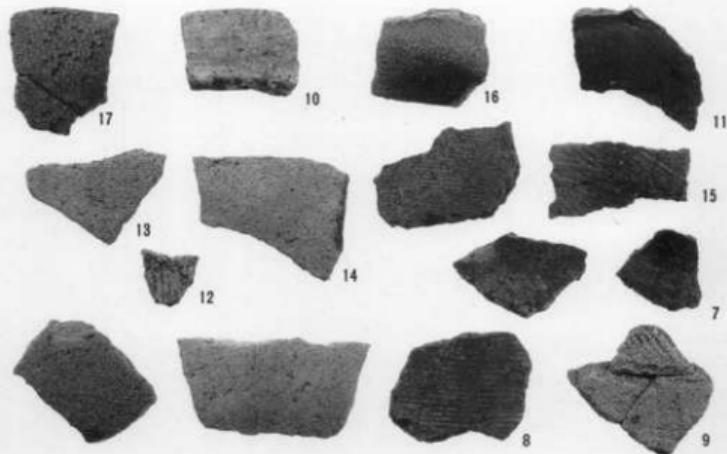




0 1 : 2 20cm







後円部掘削状況
(昭和41年掘削時
鈴木伸秋氏撮影)



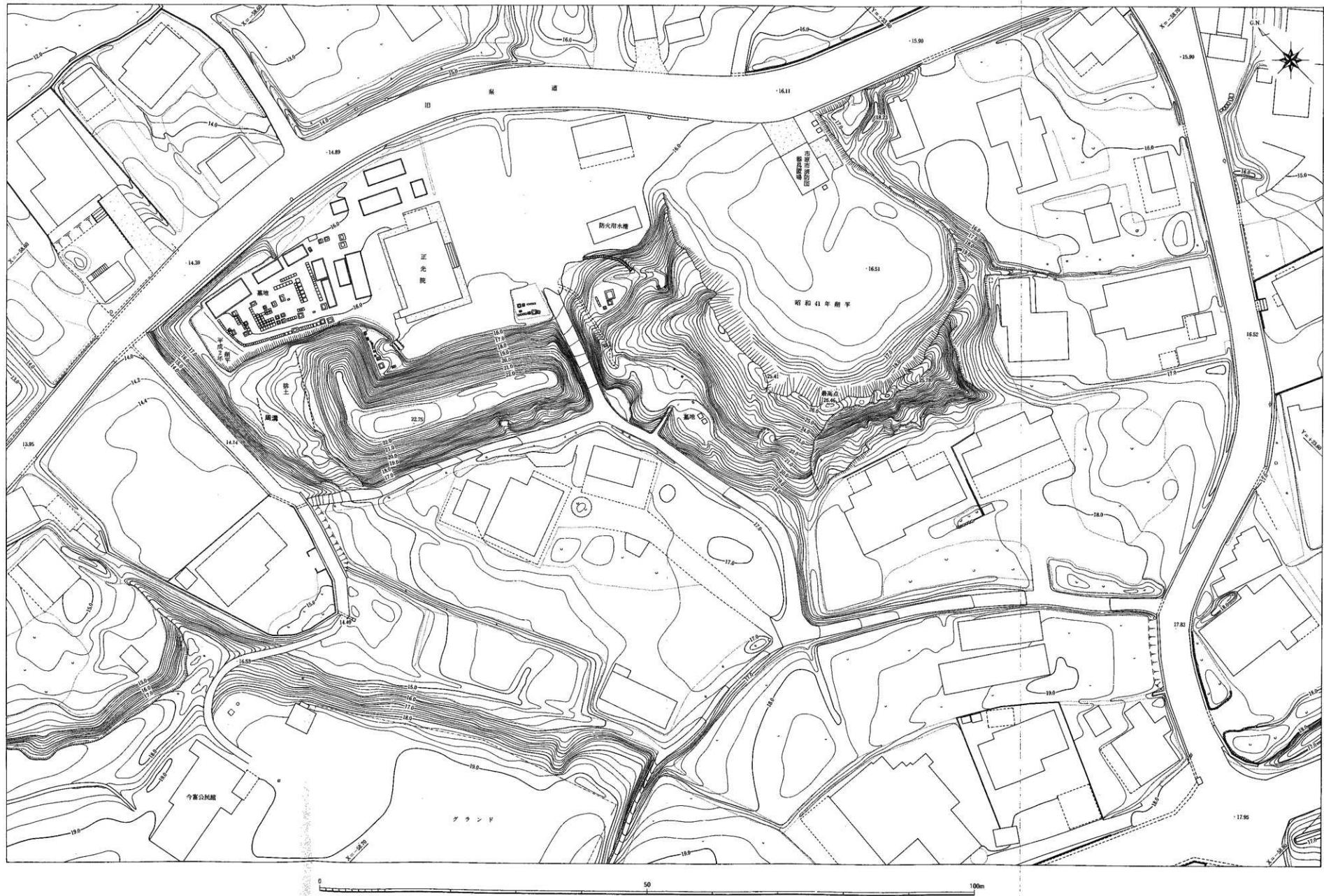


大日山古墳埋葬施設断面 (田中新史氏撮影)



姉崎二子塚古墳 (昭和44年 田中新史氏撮影)

付図 今富塚山古墳墳丘測量図



千葉県文化財センター調査報告 第221集
市原市今富塚山古墳確認調査報告書

平成4年3月30日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地
印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。